

翻刻

杉浦弘蔵ノ一ト



畠山義成 (杉浦弘蔵) 英国留学時代



犬塚孝明

同 米留学時代

## 解題

畠山義成関係資料について

今回翻刻した「杉浦弘蔵ノート」は、鹿児島県尚古集成館の所蔵にかか  
る畠山義成関係資料の一部である。関係資料は全部で五冊ある。次の通  
りである。

一、「西洋遊学日誌」(慶応元年五月二十八日〜同七月一日) 資料番  
号3033-24-228, 601(1)

二、「杉浦弘蔵ノート」第一、資料番号3033-24-228, 601(3)

三、「杉浦弘蔵ノート」第二、資料番号3033-24-228, 601(5)

四、「杉浦弘蔵メモ」第一、資料番号3033-24-228, 601(2)

五、「杉浦弘蔵メモ」第二、資料番号3033-24-228, 601(4)

これらの原所蔵者は、「鹿児島市平ノ町一〇〇」川村俊秀氏で、御子  
息の川村純治氏が同館に寄託されたものである。

一の「西洋遊学日誌」は、慶応元年五月二十八日から同七月一日にか  
けての畠山の英国留学日記である。縦二二・八糎×横一六糎の和綴本、  
墨書であるが、蠹蝕甚だしく判読困難な箇所が多い。これについては、  
すでに本研究年報(第六号、昭和五三年)に福井迪子氏の翻刻があるほ  
か、国立国会図書館の西村正守氏により「畠山義成洋行日記」として、  
『参考書誌研究』(第一五号、昭和五二年)に翻刻されたものがある。

二の「杉浦弘蔵ノート」第一は、畠山の米國留学時代、特にニュージ  
ヤージ州ニューブランズウィック滞在時に、同地より国許や友人に送

付した書簡草稿の類をまとめて記録したものである。ノートの大きさは  
縦二〇・五糎×横一七糎、ペン書である。書簡草稿数は全部で十七通、  
宛先、差出人を年代順に整理すると次のようになる。

一、一八六八年七月八日付、岩下佐次右衛門・新納刑部宛、杉浦弘蔵  
書簡。

二、一八六八年七月二十日付、嶋田・久松・吉田・大原・工藤宛、杉  
浦弘蔵書簡。

三、日付不明、伊勢佐太郎宛、杉浦弘蔵書簡。

四、一八六八年八月十七日付、宛先不明(長州藩英國留学生宛カ)、永  
井五百介・松村淳蔵・杉浦弘蔵書簡。

五、一八六九年五月付、宛先不明(薩摩藩要人宛カ)、杉浦弘蔵書簡。

六、一八六九年六月二十一日付、杉浦弘蔵宛、狛林之助・土肥又市・  
芳山五郎之介書簡。

七、一八六九年八月二日付、吉田彦磨宛、杉浦弘蔵書簡。

八、一八六九年八月十一日付、宛先不明、杉浦弘蔵英文書簡。

九、一八六九年八月十七日付、永山源兵衛宛、松村淳蔵・永井五百介  
・長沢鼎・吉田彦磨・大原令之助・工藤十郎・杉浦弘蔵書簡。

一〇、一八六九年八月十七日付、E・T・マック牧師宛、杉浦弘蔵英  
文書簡。

一一、一八六九年八月二十四日付、伊勢佐太郎宛、杉浦弘蔵書簡。

その他、英文書簡(日付、宛先不明)が五通、一八六九年八月朔日付

の「新報略訳」が一通、合計十七通である。いずれも薩摩藩留学生のみならず幕末維新期における日本人米國留学生の動向を知る上で貴重なものである。特に薩摩藩米國留学生たちとT・L・ハリスとの関係、ハリス教団からの脱退顛末、畠山のキリスト教信仰問題等が、これらの書簡には詳細に語られており、今後の留学生研究には欠かせない史料である。

三の「杉浦弘蔵ノート」第二は、右の第一と同じく畠山の米國留学時代のものであるが、内容的には、岩倉使節団の三等書記官就任以後の会議記録手控が主となっている。留学中の畠山が岩倉使節団の三等書記官に任命されたのは、明治五年二月九日（一八七二年三月十七日）である。

畠山は記録係として、久米邦武とともに欧米各国の制度文物の調査研究に従事、『特命全權大使米歐回覧実記』の編集にあたった。本ノートに記されているのは、一八七二年三月八日（十八日の誤りカ）における、官費留学生規則取調のための会議録で、岩倉全權大使の命により畠山が中心となって海外留学生調査を実施した様子を知ることができる。ノートの体裁は、第一と同じく、縦二〇・五糎×横一七糎の大きさで、いずれもペン書である。岩倉使節団の留学生調査内容の一部を知る上で貴重である。

四の「杉浦弘蔵メモ」第一は、畠山の書簡草稿、日記、その他雑記の類からなり、文字通り「覚書」である。縦九・五糎×横一六糎の手帳にペン書で記されている。内容を整理すると、次のようになる。

#### 書簡草稿

- 一、一八六六年七月二十三日付、国許宛（氏名不詳）、杉浦弘蔵書簡。
- 二、一八六六年十二月二日付、国許宛（氏名不詳）、杉浦弘蔵書簡。
- 三、一八六六年十二月下旬付、国許宛（氏名不詳）、杉浦弘蔵書簡。二通。

- 四、一八六八年六月二十六日付、花房虎太郎宛、杉浦弘蔵書簡。
- 五、日付、宛先不明、英文書簡。

#### 日記

英仏紀行 一八六六年八月二日～同八月二十五日。

#### 雑記

- 一、富田鉄之助作、漢詩 一篇

- 二、作者不明 英詩 一篇

英国留学時代の国許への書簡、夏期休暇における英仏紀行日記等、今まで知られていなかったものだけに、薩摩藩英国留学生の研究にとって重要な史料である。

五の「杉浦弘蔵メモ」第二は、前者と同様、縦一〇・五糎×横一七糎の手帳にペン書で記された覚書である。内容は、米國ニューブランズウィック時代の英文書簡写、陳述書、岩倉使節団姓名録等よりなる。

#### 書簡写

- 一、一八七一年九月二十七日付、文部卿宛、D・T・レイリー(D. T. Riley) 書簡。

#### 書簡

- 二、同右、訳文書簡。

三、一八七一年十月十三日付、杉浦弘藏宛、ラトガース大学長キヤム

ベル(W. H. Campbell)書簡。

四、同右、訳文書簡。

五、一八七二年三月十八日付、杉浦弘藏宛、D・T・レイリー書簡。

六、一八七二年三月二十九日付、J・M・フェリス(J. M. Ferris)宛、

岩倉全権大使書簡。

七、明治五年二月二十三日付、岩倉全権大使宛、森有礼書簡。

八、一八七二年四月三日付、岩倉全権大使宛、W・W・ホピン・ジュ

ニア(W. W. Hoppin, Jr.)書簡。

九、日付不明、同右書簡。

一〇、一八七二年四月十六日付、岩倉全権大使宛、W・バーナード(W.

Barnard)書簡。

一一、日付不明、岩倉全権大使宛、W・H・キヤムベル(W. H.

Campbell)書簡。

陳述書

一八七一年十二月十八日付、英国留学生ノ義ニ付陳述書。

雜記

一、一八七一年八月十四日、杉浦弘藏帰国送別会(於セントニコラス

・ホテル)参会者人名控

二、手島精一作、和歌 一篇

三、作者不明、漢詩 一篇

四、岩倉使節団姓名録

英文書簡は、ラトガース大学教授デヴィッド・マレーの日本招聘に関する、岩倉使節との交渉関係が主となっている。「杉浦弘藏ノート」第二と同様に、岩倉使節団の米国内での活動状況を知る上で傍証となる貴重な史料であろう。

以上、畠山義成関係資料の内、今回は「杉浦弘藏ノート」第一と第二の全文を翻刻することにした。分量が多いこともあって、便宜上、「ノート」と「メモ」を分け、「杉浦弘藏メモ」第一と第二は、次回以降に順次翻刻の予定である。

ここで、畠山義成の人となりについて、簡単に触れておく。

畠山義成は、天保十三年(一八四二)九月、鹿児島城下平ノ馬場に出生、丈之助あるいは純常とも称した。家格は一所持格、いわゆる上級藩士で当番頭の重職を代々勤めている。畠山氏の祖は、室町幕府管領家の一族で、河内国守護であった畠山中務少輔頼国入道橘陰軒といわれ、頼国が天文年中に戦乱を避けて薩摩坊津に下ったのが最初であった。その子長寿院盛淳は、御家老役として島津家に出仕、関ヶ原の戦では島津義弘の身代りとなって、壮烈な最期を遂げている。嫡子長吉は阿多内膳忠栄と称したが、のち島津光久の庶子義扶を養子としてもらうけ、畠山姓に復し(畠山式部基明)、蒲生地頭職二百石を領するに至った。畠山は、慶応元年(一八六五)三月、薩摩藩英国留学生の一人に選ばれ渡英、同地のロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジに入学する。杉浦弘藏は

その際の変名である。旅の経過や英国での生活は、先の「西洋遊学日誌」（畠山義成洋行日記）に詳しい。留学二年目の夏期休暇には、フランスや英国内の視察旅行を単独で試みるが、この時の見聞も、旅中日記「英仏紀行」（杉浦弘蔵メモ）第一）でほぼ知られる。二年間の英国滞在を切り上げて、畠山が他の五人の仲間と米国へ渡ったのは慶応三年七月上旬のことであった。同地で神秘主義的宗教家トーマス・レイク・ハリスの主宰するコロニー「新生社」に参加し、特異な宗教的体験をしたことはよく知られている。一八六八年（明治元年）五月十三日、「愛国」と宗教上の理由によってコロニーを脱退、ニュージャージー州のニューブランズウィックへ赴き同地のラトガース大学へ入る。脱退顛末については、一八六八年七月八日付の岩下・新納宛書簡に詳しい（杉浦弘蔵ノート）第一。明治四年四月、畠山は太政官からの帰朝命に接し、同年十月ヨーロッパ経由で帰国の途に就くが、パリに到着した時、岩倉全権大使により再び米国へ呼び戻される。帰米した畠山を待っていたものは、岩倉使節団三等書記官の辞令であった（明治五年二月九日付）。その後一年半にわたり、使節団とともに米欧を巡覧、各国の制度・文物の調査記録にあたった畠山は、明治六年九月十三日、ようやく横浜に帰着した。羽島出帆以来八年半ぶりの帰国であった。留学当時からラトガース大学の旧師デヴィッド・マレー教授の日本招聘に尽力するなど、祖国の教育改革に深い関心を抱いていた畠山は、帰国後の十月文部省五等出仕に補せられると同時に、わが国教育制度の改革に着手した。同年十二月、新

装なった東京開成学校に校長として就任、浜尾新らと学校行政の指導に辣腕をふるうのであるが、在職のまま翌七年六月には文部少丞、さらに十一月に中督学へ昇任され、中央における文部行政でも斬新な改革案を提議するなどの幅広い活躍をした。この間、東京書籍館、博物館両館長を兼任、わが国初の図書館行政にもあたった。しかし、この頃から肺を患い、時間の経過とともに病状は悪化して行った。明治九年（一八七六）四月、病をおして、文部大輔田中不二麿に随行して米国フィラデルフィアの万国博覧会に赴くが、着米後間もなく病床に伏す身となる。滞米中の六月、母校ラトガース大学から修士号を授与される榮譽を受けている。病状は予断を許さないところから、医師たちが帰国を勧め、十月三日、サンフランシスコから米国郵船シテイ・オブ・ペキン号で帰国の途に就いた。だが、船中友人たちの看護もむなしく、畠山は十月二十日午後六時ついに帰らぬ人となった。享年三十四歳であった。畠山は、わが国教育界や明治官界において目立つ存在ではないが、敬虔なクリスチャン（一八七〇年、ニューブランズウィックの第二改革派教会で洗礼を受けている）、真摯、純粋な文政家として、日本の高等教育の普及と改革にその一生を捧げたと言える。

以上、畠山の簡単な経歴スケッチを試みたが、彼の国家意識や信仰の問題については、「杉浦弘蔵ノート」及び「杉浦弘蔵メモ」を中心に纏めた拙稿「薩藩留学生畠山義成の西欧体験——国家意識の形成とキリスト教——」（拙著『明治維新対外関係史研究』、吉川弘文館、昭和六二年、

所収)を参照されたい。

最後に、「杉浦弘蔵ノート」並に「杉浦弘蔵メモ」の翻刻を快く御承諾下さった原所蔵者の川村純治氏、及び史料の複写その他利用に際しお世話になった鹿児島県尚古集成館の方々に対し、記して謝意を表する次第である。

#### 凡例

- 一、本文中、適宜句点および読点を附し読み易くした。
- 一、仮名遣いは原本通りである。
- 一、字体については、旧字体、略字体、異体字、変体仮名などを通行文字に改めたところがある。
- 一、不明箇所は(不明)、欠字箇所は(欠字)、難読箇所は□を以てあらわした。
- 一、私注は( )を用い、字句について推定の場合は(……カ)の如く記した。

# 杉浦弘蔵ノ一ト 第一

Soogiwoola Ko-Zo's Notes. 5th July 1868

一、畠山義成より岩下方平・新納久脩への書簡（一八六八年

七月八日）

米國新武良舞須雲伊旗ヨリ 杉浦弘蔵

暫時者御疎遠罷過不本意之至り平ニ御海恕之程仰申候、然者當時柄益御壯剛御精務之□珍重奉賀候、扱而追々之新報ヲ以テ乍恐方今皇國之形勢ヲ奉窺ニ内憂外患是レ一ニ至リ、遂ニ國家紛乱ニ相及ヒ候、是レ天地自然ノ道理ニテ人力ノ不及所ナリ、ケ様萬民塗炭之苦ミニ蹈ク候ヲ今日臣子ノ情トシテ誰かハ天朝多難之時ニ當テ王家ニ微命ヲ捧ケ萬民ヲシテ干戈ノ苦難ヲ免カレシメ、名分大義相立政體簡易文武一途王政復古之大典ヲ以テ皇國ノ全疆唯為一家平治セン事ヲ欲シ願ハザラン哉、然ルヲ況ン乎萬里隔波之異邦滞学スル小子等ニおひてハ國家靜謐タラン事ヲ願ウ之情ハ日比愈増候、又遠海ヲ離レテ勉学中人力ノ不及事ヲ如何程慷慨苦心スルトモ迎モ益ナシ、唯己レノ職ヲ尽テ天命ヲ待而已時至ハ微力ナカラ抛身可奉報御國恩決心之外無御坐候、実ニ至微ノ小志ヲ以全世界各洲古今ノ形勢ヲ篤被勘考致候ニ盛衰治乱之例甚多事、日月東山ニ出テ西山

ニ傾キ、或ハ四季ノ還環亦相同シ、何處ノ国ト云テモ内乱ノ煩ヒナシニ開化致候人民ハ無之譬耶蘇紀元前五六百年間ハRome又はGreek国ノ教化全體開ケ者學術茂盛ニシテ或ル物ノ造管術杯ニ於テ當時西洋諸洲ノ上ニモ間々出ルノ由ナリ、併近世發明ノ傳信機又蒸氣車船舶ニ於テハ別段ナリ、是等ハ古今ノ無例之業歟此Rome并Greek往時ハ非常之強国ニテ勿論豪勇之將士も餘多出在有之始終大小戰之取合ニテ遂ニ洋洲ヲ一圓打從ヘシ勢ヒナリ、雖然當時ニ至而ハ甚タ衰微ニテ英仏米ノ開化トハ同日ノ論ニアラス、是則一ノ盛衰天理ノ然ラシムル処ニテ人力ノ不及ル所ナリ、其以來近世ニ於テハ丁度近比モ御存之通英仏共ニ国内ハ勿論外邦ニ於テモ干戈ヲ動シ候次第典蹟歷然タリ、於米國モ同断三百七十六年以前「イタリヤ国航海者」Columbus「スペインノ政府ニ強訴ヲ以テ送ラレ此新世界有ル事初テ發明サレ候処、當地素ヨリノ人種ハ「印度ノ種ト甚似寄り随分暴勇ニテ軍サ好キノ人民ニテ有之タル由、併右之「Columbusニ者一牀丁寧ニテ其後段々洋羅巴諸蕃ノ人民當地江移住致候処互ニ失敬僉暴之事件共到来致シ遂ニ洋人ト素ヨリノ米人数年ケ間合戦、時トシテハ実ニ親敷成事も有之、其後英仏ハ勿論其餘之諸国も許多之人民来米「メキシコ并スペイン杯と合戦、又世界之論杯ニテ於當国英佛大ニ合戦等挙不有数、最国内軍サノ大ヒナルハ此七年以前ヨリ四年以前迄四年ケ間テ南北二ツニ相分レ頻リニ戦争ニ相及ヒ実ニ沢山之人民ヲ殺シ、然レトモ其レ致方ナキ情合ト聞カレ、此軍ハ大ニ米國之為メ相成候トノ説ニ而候、必ス国ハ干戈ヲ動シ後ハ開化スルモノ歟ト愚存罷在候、然者日本支那ニおひて

ハ丁度當時開化ノ時至レルナラン歟、國家ノ為メ御同慶不過之次第奉存候、  
 □而愚身モ致スノ時歟ト存シ候俛直様小子等も国難ニ走帰リ聊カ微力ヲ  
 尽度覺悟罷在候得共、決而事ヲ輕卒ニ断スル訣ニ而ハ無之退而篤ト愚案  
 ヲ廻ラシ候ニ、己レ學未成且又不肖之僕殆と老年歟ケ英学ヲ廢シ候、今  
 暫時モ勉学ニ身力ヲ抛チ学校デモハイリ何レノ筋今三四年モ滞学「陽氣  
 發所金石亦透、精心一至何事不成」、勿論僕等皇國出帆之折ハ滞学中國家  
 紛乱ニ望テモ随分出来ル丈ケニ於テハ決而不動「學業不成死シテ再ヒ不帰」  
 トノ決心ナレハ自ラ國難ハ覺悟之ものニ而□□珍異トスルニ不足ラ、唯  
 悲哀ノ甚敷ハ往時王室衰微之砌兵馬ノ權武家ニ帰シ、夫々文武ニツニ分  
 レ公家ハ泰平ヲ重ルニ付テ彌衰弱ニ流レ外邦之如何程開化致候事情モ不  
 相分唯朝夕事トスルハ我朝ノ詩歌管弦而已ナリ、然ルニ武家ハ殆ト三百  
 年ニ近キ泰平ヲ重ルニ付テ幡帙ハ日ニ長シ実ニ名而已ノ武家ニテ、下萬  
 民ヲ支配スル能ハス故ニ富メル者ハ彌榮ヘ貧者ハ彌苦難ニ迫リ遂ニ當今  
 之形勢ニ成立候罪之人民ヲ多く殺害スルヲ聞ハ心情ニ於テ不忍次第如何  
 シテ是ヲ助クベキ哉、是誰之過ゾヤ一概ニハ誰申上候得夫ニ有志誠実之外  
 人ハ随分兄弟ノ親ヲ以テ當時日本無学之人民ヲ開化スルニ付而者身命ヲ  
 抛候族輩モ有之候得ハ攘異論ヲ打捨先ツ商賈人之輩ヨリハ本統ニ学問シタ  
 ル有志之教師江□□致度者ト覺悟罷在候、是迄始終皇國之暴論ニ動モス  
 レハ「外異之策ニ蹈ク杯上策等數物ヲ理會致候得共是レ腐儒之論ニテ抑  
 末ナリ、彌誠実ヲ以テ交レハ彼等亦其レニ應ス併是ヨリ欺偽ノ策ヲ以テ  
 スル時ハ彼等又其上ニ出ツ如何トナレハ有志之洋人ハ甚以神誠ヲ尊崇致

候故、夫レニ反シテ策ヲシキ欺偽ノ術ヲ甚タ惡ム、乍憚我朝も今靜謐之  
 姿相成候て議政所ハ勿論諸国江大小學校之設ケ當時第一之急務被存候、  
 扱僕等殆ト老年癡学致シ無扱情合ニテ過日轉居致候進退乍大略左ニ申上  
 候、○先度僕等モ財乏憂患旁之処不得止而一同出英ニ相及候以来米人  
 「トーマス・レイク・ハリス」  
 「ハリス氏之許ニ滞在致居候次第ニ而御坐候、本ト此「ハリス氏ハ一人  
 ノSpiritualニテ幼年ノ折柄勉学之為耶蘇基督ヲ尊崇信愛之何歟常人トハ  
 スピリチュアル  
 異リ頻リニ深遠之道ヲ學ヒ時トシテハ神声ヲ聞タル杯ト云感覺モ有之七  
 八年以前ニハ當国ハ勿論英國迄も渡海、頻ニ強ク右無形ノ説ヲ解シ候得  
 共、數百之内ハ僅カ之人々ハ成程奇異ノ説法ダト云輩も有之タル由候得  
 共、其余之人数信用スルハ扱置却而反對スルノ勢ヒニテ如何程己レノ信  
 スル道ヲ誠ノ神道ト説テモ何分無形之事ニ而英國ニ於テハ信スル輩モ在  
 リ少ク、當国ニ於テモ同断之勢ヒナリ、夫故或日於「新約克」ハリス之  
 説法ニ己レニオヒテハ此間ハ一向神言ヲ純粹ニ説ク雖然世人皆今日之利  
 欲耳眼矇ニ相及ヒ本正之神命ヲ理會スル能ハス就而者己レ如何程其正意  
 ヲ説解致候而モ詮ナシ、此上ハ神吏ト成リ全ク世間ノ交リヲ繼チ国ニ而  
 閑静之地江引入リ唯天父ニ遵奉スルノ道ニ而已心身尽度若シ同意之輩有  
 之ニ於テハ必ス己レニ從來シテ共ニ天父ニ遵奉スベシト説破致候処、數  
 百人之内ヨリ僅カ兩三輩之間同意ニテ夫ヨリ国ニ而幽靜ナル「Wassatic  
 ト云山中ニ引込リ、神事ノ勤務ト云テ農工ノ業ヲ自ラ為シ押テ夫レヲ兩  
 三ノ門徒ニモ教ヘ六七年ケ間尚其道ヲ勉強致候、其間ニ全ク通常ヨリハ  
 異タル無形ノ書ヲ神命ト云テ著述致シ候処、面皮同シカラサレハ人心亦



同シカラサルノ道理ニテ右之書ニ依テ追年少シハ「ハリス江就ク旅輩モ有之漸々其門徒モ至テ僅ナカラ増益スルノ勢ヒナリ、然ル折柄一昨年時宜ニ依テハ兩公子洋航ニ可相成由ヲ「ハリス聞出シ、是レ実ニ能キ折ナリ先ツ己レノ道トスル神道ヲ御説話申度ヒトノ趣意ニテ同年冬英行ヲ促シ候時宜ニテ小子ハ「ロンドンニ於テ彼江面會ス、則ヨリ至テ高遠ナル無形ノ説ヲ解ク而巳ナラス Spiritual ニテ一ミウトノ内ニ日本江行テケ様々ノ形勢ヲ易タ抔ト云テ手扨トモ致シ何分奇異ナル教ナレハ最初ノ程ハ信用シ難ク、何レノ筋小生等ニ於テハイマタ學問不成ナレハ通常ノ大道ヲ差置テ理會シ難キ無形ノ教説ハ甚以信用出来兼勿論耶蘇基督之誠道ヲ者ノ其本意ヲ理會セスシテ其末流ノ道ヲヲ信用スベキ道理ナシ、何レ僕等ノ急務ハ古今諸洲ノ形勢萬書ニオヒテ觀察各国人民善惡賢愚ノ事情等篤ト解心本統ノ神誠探索スルコソ第一と心願致候得共、「ハリス僕等ニ云テ曰ク神書勉學之砌ハ英人ヨリ決而解キ明シ抔受ルコトナカレト大ニ禁制ス、ナゼカト問フニ皆當時之所謂耶蘇教ヲ信スル洋米人民ハ耶蘇純正ノ教意ヲ理會セス誤テ本意ヲ失セル故ナリトノコトナリ、此レ未タ小生不解、度々承リ候次第御坐候、併通例之歴史讀又ハ天文数学等ニ於テハ決而關係セス、「ユニワスチー學校ニ於テ不相替以前之通一同勉強致居候処此間岩佐殿トノ不合色々ノ事件モ有之候得共、最早御存之事ナレハこの件申上不及、昨年四月比（町田久成）「町民殿并（ローレンス・オリファント）「ヨリハント氏「ハリス氏住居致候 Valdes ト云一ノ田舎追見舞致居ラレ候折柄、「ヨリハントヨリ尅封ヲ□由候、其趣意ハ方今日本ノ情態危急存亡ノ秋ナリ、誠ニ先帝

崩御以來、今上皇帝御後見職將軍職諸侯方并評議役等夫々次序ヲ蹈テ人オノ出ルハ実ニ此時ナリ、就而者我等ノ内ニ四人丈ケ可成速岩佐殿ノ御（岩下方平）歸国無之以前ニ日本江馳セ歸リ、其器ニ当ル人物撰出等尽力且ハ「ハリス氏ガ説ク道ヲ「プリンス公江建白申上可成外邦トノ條約事務も取細メ方等種々周旋致度、若岩下氏御歸国之上者最早「比義国抔ト條約ノ事ナレハ甚難ク夫レ故へ上野一人ハ此切態歸国之決心ニ候間、外三人之処一日モ速ニ一同評議ヲ遂ケ歸国ヲ決スベクトノ趣ナリ、則一統吟味之上小生ニハ當国滞學ノ身トシテ未タ學業不成乍微力分ニ應シ切磋之功ヲ積リ時至テ報シ國家二度クノ素志ナリ、誠ニ小子等ハ諸生ノ身ナレハ勉學中國家紛乱ニ及テモ君命無之テハ決而事ヲ卒直ニ不可計ル勿論日本ヨリ出国之折外国滞學中ハ可成故國政事ノ議論ハ措テ、今日己レノ職トスル第一ノ急務ハ、成學報國之大功一日も速ニ遂ケ度トノ覺悟ナリ、當時如何程國乱到來致候而も僕奉仕スル処ノ君公ハ賢明ニマシマセハ自時勢相應ノ御所置可有之候、尤時ニ良友トモ有之候共彼等ハ我朝ノ政事ニ於テハ至テ賢ク僕ニ於テモ速而速ニ尽力致度トノ愚存も有之時者右之朋友共御□通可致候有之ニ、當時學問未熟之身トシテ歸國致シ最モ重大ナル國家之政事ニ關係致ス抔トハ大ニ意外ノ次第ト即座ニ遙ニ書ヲ認メ申切置候処、（町田久成）遂ニ上野志人歸國之決定被致候次第ニ自ラ同人ノ細情相成候之筈トハ存（不明）乍序此段も申上越候、然ニ先達而申上通り同年七月末比小生等ニも財乏ニ付旁憂患も不少ナシ、「Glaverニモ其比歸英ニ而於長崎御國之方江多財ヲ御借上申上タルトノ様子ニテ於此又々諸生方江出財之承ニ

付甚々致嫌避ノ勢トナリ、然レトモ強ヒテ是非借財所望致ニ付而者彼レモ薩恩ヲ蒙候事不□候へハ定而不仁之振舞ニ有之間敷筈ニ而僕等も何分恐懼スル処ハ當世御国元内外非常ノ御入費ニテ御疲弊ノ折ナレハ決而不勘弁ニ多財之借用共致候而ハ御損益ヲ不憚之仕方且御国各も相抱係ハル訣ナレハ可成備財減少セシト旁遠忍致シ如何ハセント苦心ノ折柄、「ハリス於龍動」ヲリハント之旅宿江来リ、折節一同集會之期ニテ彼レ我々共ニ云テ日「承ハレハ御辺等も財乏ノ義ニ付頗ル憂心之由、己レニ於テ亦氣之毒之次第就而者若御辺等一同誠心ヲ以充分天道ニ順從スルノ志有之ニ於テハ米國ニ来ラン乎否乎尤テ者己レノ住居アミニヤニ於テ随分英佛学又ハ「グリーキ」ラテン学其外数学陸軍之手練等好次第己門徒ノ内ヨリ指南可出来者米行ニ付入費等之處必ず心配スルコトナカレ、凡テ己レ世話可致」トノ事共咄候ニ直様米行致スト云決心ニモ不至如何トナレハ邂逅遙々英国江遣ハサレ滞学ノ身トシテ學業未タ不成且ツ君命モ不受ケ事ヲ早卒ニ決断スルハ甚以不本意之至勿論當時英國ハ政府ハ仕立并其上学校之役者余万端世界第一開化ノ地ナリ、方今日本ニ於テモ外邦交接親睦ニ付而モ事情通信ニ至リテハ何レ其地ニ居テ致シ最モ要用ノ信正之説不相識候而者却而我朝政治家之妨ニも相成訣ニ候得者小子等ニおひてハ未熟之學生ナレハ説モ其レ丈ケ未タ實ラス、何分大業ヲ成サント志ス者ノ此節出英ハ己レノ失誤ハ勿論、洋人ニ對シテ信義ハ失ヒ皇國ノ御為メ甚無益ナリト存候得者、實以不轉時宜合ニ付篤々前後之事も粹思熟考ニ及候処、何レノ筋充分ノ經驗ナシニ不理會ナル無形ノ異教ヲ全ク至微

ノ疑モ無之信用之道正敷トモ不相覺夫故本統ニ其道ヲ受取ルニモセヨ又ハ退クルニモセヨ何分正邪偽誠之間モ克々并別理會スルハ僕等ノ任且財難モ有之実ニ進退屈窮シテ所置スルニ道ナク者、米行致候得者好通り随分学問可出来ルト「ヲリハント」ヨリモ承リ候次第ニ而然者外ニ適當之道ヲ不知一同米行之方ニ同意決心シ、夫レヨリ一七日目ニ英国出立致シ「ハリス氏ガ説ク道ヲ經驗致度志願ニテ「アミニヤ」江着候処則「ヲリハント氏ガ言葉ニ今一句も経ルニ「ハリス帰著之賦候者何分□□我々共之学法も可立夫レ迄ハ勉学ヲ止メ家内之仕事又ハ葡萄園之仕事杯ニおひて加勢出来哉否哉之趣ヲ問ヒ申候ニ付、我々共ニハ夫レハ餘リ長キ事ニ而も無之僅一句位之日数ナレハ随分仕事可致ト申置候処、其日限ニ者「ハリス帰来我々共ニ向テ曰ク、此節勝レタル新地ヲ見出シ候ニ付都合次第可成速ニ彼地江我黨凡テ轉居之賦ナリ、就而者英ノ Captain Ruxton 勝レタル正大ノ新法學則等モ無程可立トノ趣共ナリ、夫故我々共全ク先暗キ事ナカラ決而比一言ニ相違ハ有之間敷筈ト存シ先ツ其期ニ至ル迄ハ全ク私ノ理ヲ打捨克己復禮之本ヲ務メヨ僅カ至微ノ私心タリトモ有之候而ハ今日如何程神ノ為メ粉骨碎身仕事致候テモ其詮モ無之候得者如何様賤敷仕事ヲ言付ケラレテモ頓と夫レヲ否ミガラス天父ヲ尊崇信愛シテ欣々然ト唯其仕事ニ全身ヲ抛チテ成スガ則「ハリス氏門ニ入ル初メナリト承ル事ニテ、夫ヨリ学問モ取止メ毎日朝々暮ニ至リ八九十度以上ノ炎天ニ葡萄園ノ仕事又ハ耕作ニ一同身力ヲ費シ候処、精々心ヲ込テ働候得共、

此人英國ニ於テ一人ノ物主ナリニシニ此節「ハリス」門下ト成渡海セシ人ナリ

時トシテハ疑モ生シ大道ヲ蹈シ行ハント志ス者ノ學問ハ為サズシテケ様農夫ノ業共為シ居候テハ甚以意外千万却而奇怪ニ覺ヘ候得共、先ツ是非黒白見ル迄ハ試見致シ度トノ賦ニテ僅カ至微タリトモ私意ト存付候事ハ都而捨切り奴僕ノ體ニヤツシテ一同紛骨ヲ尽候次第ニ而御坐候、然ル折柄旧冬十一月比一同「Brocton」ブロクトン是レ則今度下地ノ処ヘ移リ候、其時分嶋田（仁礼景範）、久松、工藤三生モ休校ニテ「ハリスヲ見舞致候処、則彼レト面會ニテ説話共有之候処、其道徳ニ感服信用ヲ取り、是レ初メテ面會之事ナレハ其迄モ不通充分理會トモ不□□不候、夫レヨリ暫時ハ一所ニ罷在一ノ教人ヲ「ハリスの世話ニテ勉学モ相初メ迪モ充分思通ニ者不有之候得共、追々大ナル陸軍校杯造營ニ付先ツ當分之所者可ナリニ小学舎ニテ一同讀書罷在候処、三月末比ニ至リ「ハリス日本人之為メ頻リニ苦痛致此苦痛ハ不思議デモ彼レノ門下江心中純誠ヲラザル時傳信機ノ如ク直ニ「ハリス江通スルト申事ナリ併シ遂ニ其通リ的當スルト云フ訣モ不主候得彼ノ門徒ハルテ「ハリスノ言葉ハ神命ト覺悟ニ而態其通リ通シ全ク間違ハ無之モノト信用シ間ニハ父母故朋道も打捨テ身命全ク人心ノ同異ハ理會シ難キモノナリ」候ニ付、我々共之内何歟不正之心意共ハ無之哉精々各祈神省察スベキトノ事ニ而一向面々省身糺明致候得共、遽而及ニゾト云失誤モ無之処ヨリ何レ外ニ所置之道モ無之何分學問而已ニ餘リ心志ヲ込メ今日之仕事ヲ怠リ候ニ訣歟不□若其義ニテモ候得者、此上勉学之時モ減スベシト旁一同吟味ヲ遂候処全ク勉学ヲ打措仕事而已為ト云説モ有之又ハ不学ノ我等夫レデハ不相濟ト云ノ説モ有此上紛々之躰ナリ、ケ様不一致之形勢ニテ僅カ少々之讀書共致候テ何ノ益歟アラント終ニ凡テ取止メ之方ニ一決シテ「ハリス江其趣候処彼悦シテ日、是レ己ノガ待所ナリ、学ヲ全ク頼ミニ不致是ヨリ仕事に身力ヲ尽度トノ志シ美ニ頼母敷ナリト

ノ事ニ而夫ヨリ又々毎日農業ニ手足ヲ馴ラシ彌私心ヲ去リ如何ナル下賤ノ事も不厭精力ヲ夫レガ為メニ費シ居候処、時トシテハ色々疑心モ生シ畢竟皇國モケ程危急ニ迫リ殊ニ此節之國乱ニ許多之人民戦死ニ及ヒ當時京師ニ於テハ非常之御多難下萬民亦今日貧窮之苦ミニ陥リ候事情旁遙察仕候処、當分臣子之情トシテケ様之仕事共致居候而者中々不被息次第御推量可被下候、然レトモ兼而「ハリス之説ニ己レ門徒ヲ教導スルニ付而者決而一事モ神意ノ外ニ出ルコトナク皆是レ直チニ神ノ「ハリス」ヲシテ諸民ヲ教ユル為メ命シ玉フトノ趣ニ而何レノ道ニ決定スルモ一身汚潔之名聞杯ハ鳥渡も關係不致候得共、何分日本ヨリ多人數當地江滞在之一事ナレハ僥忽之決断シテモ不相成何レ相當ノ正道も可有之ト不肖之量見ヲ全ク捨切テ「ハリス始終之言行且ハ門弟教導之振舞モ慎テ注意致居候処事ニ依リ頻リニ替リケ間敷訣モ有之候処ハ愚考ニハ若シ此「ハリス氏ガ云所凡テ神命ナレハ決而今日彼ノ教ニ於テ過失ハ無之筈之事ニ當時之様猫眼之變スル如ク神命是レ彼門下ノ呼聲ナリ輕々敷交替致候而者小生ニおひて一向信用出来兼子候次第尤モ神書ハ勿論其外ノ書籍モ勉学ヲ禁シ近比ニ至リ彼ノ言ハニ「我SpiritualスピリチュアルニテArcana of Christianity此二冊ハ則彼ノ著述日本語ニ譯セラレシヲ見シナリ、是レ則日本人其書ヲ訳スルノ時ナリ」トノ事ニ而早速其功ヲ遂度存候得共何分時ヲ充分與ヘス不相替終日農業ニ尽力致候事ナレハ、一同□□ニ至テハ身心共ニ勞レ迎も轉訳スル程ノ氣根モ無之一向埒モ不明勢ヒニテ若シ又轉訳ノ義神意ニ候得者農業共ハ凡テ打捨テ可成速ニ其訳ヲ可成頼筈之処ニ右通り終日ケ様之仕事共致候而も邂逅神命有

之候テモ其詮モ無之次第何共奇怪千万其意ヲ得難キ処ヨリ大キニ疑惑モ生シ信用出来兼ル折柄、「ハリス之言ハニ」御辺等共全ク我が教道ヲ受ルニ用意相成候哉、若其通之義ニ於テハ世之中ニ尽力致シ度ヒトノ通例ノ高名欲ヨリ成志ハ凡テ打捨テ一向信實ニ神ヲ尊信シ次ニ人ヲ信スルコト父母兄弟ノ如シ」トノ趣ニテ、是等ハ実行出来候得共誠ニ卓越タル神教ニテ感スル次第、併シ是右様如何程聖言ヲ唱フルトモ未タ其實ヲ見サル折柄、又彼ノ言葉ニ「萬一神命ノ下ル時ハ随分古俗ヲ捨切テ日本ニモ反對シテ劔戟ヲ取り又ハ「亜佛利加ニテモ」印度ニテモ其余何処之異邦ニテモ行テ道ヲ傳ヘヨトノ神命有ル時ハ直ニ快然ト其レニ全身ヲ抛チ生涯デモ其地ニ住居致候程之決心無之テハ己レノ新敷教ヲ充分□テ理會スル義出来難シ」トノ事件共承リ候処、是等ハ実ニ不輕一条ナレハ決而龜忽ニ即言不致、如何トナレハ彼ノ命スル所ハ門下之輩皆神命ト心得候勢ナレハ時宜ニ依テハ如何様異変之事ヲ彼レ我々共江命スル歎モ難計シ其期ニ望ミ比奥之振舞共有之候而ハ決而不相濟訣就而者飽まで國恩深キ小子等ハ実ニ此レハ不容易勘弁之秋ニテ乍恐君公非常之御英断ヲ以テマツ不肖ノ僕等ニモ今日外邦滞学之義乍漸相調大ニ少シハ矇昧も相開キ各国之事情等も相学ひ候訣ニテ其国家之大金ヲ乍費於爰其本ヲ忘レ報國之切志モ例レ一向己レノ國體モ不輕薄ニ誠偽不明ノ道ニ身命ヲ抛チ國恩ヲ打忘ル杯ノ説トハ小生ニ於テハ甚以同意シ難ク、勿論我等ノ社中ニモ大議論數刻ニ及ヒ候処、遂ニ兩説相分レ逆もケ様粉々之形勢ニ而ハ何ノ成功モ無覺束者小生ニおひてハ如何様勘考ニ當リ候而も右之生國ヲ打捨時

宜ニ依テハ敵對デモ出来ル決心トハ不同意ハ勿論却而妖怪欺偽之説ラシク相覺ヘ候得共、忘ツニ自決ヲ不用一向天導ニ可順從トノ覺悟ニテ精々大道ヲ蹈ミシメ玉ヘト皇天上帝江祈誓拜問致候処、遂ニ何レ此節ハ「ハリス之門ヲ出テ他所ニ於テ勉学心志ヲ尽シ各洲政府之形勢軍備之盛衰強弱且人民志氣之剛憶賢愚之情態旁知識ヲ得ルノ学問コソ今日愚子之任ニ於テ尤肝要ナリ、然ルニ只今之様勉強モ不致サ農業而已ニ身力ヲ費シ候而者何レノ世ニ歎成学スベキ哉と頻リニ己レ今日ノ矇昧モ頭ハレ候処、當時僕等之任学問第一と決心致候得共如何シテケ様之時宜ニ一日モ猶豫スベキ哉断然と翌十二日舊曆五月覺悟に就き一同江モ相談ニ及候処、何レモ意外ノ事ト相見得如何トナレハハリス之此時迄ハ一同言ヲ信シ候故ナリ随分異論モ有之然共成程情ヲ以テ言ウナレハ遙々學友に離袖スルモ甚タ心中不被忍次第、併シ名分大義ニ於テ不得已事此決意ニ及候訣ナレハ強キテ愚存も述ヘ是非「ハリス江通し度き旨所実ニ及ヒ候処遂ニ衆論モ先ツ「ハリス江形行ヲ以テ申開キタラハ適當之神命モ可有之トノ事ニ而則チ彼江通し候処、同人ノ言葉ニ切々左様之事乎是レハ誠ニ悲哀之次第ナリ、併シドウモ無致方情合ナレハ何分咄通り致タラヨカラウ」トノ趣ナリ、其節神命ニ違背スル哉トノ質問モ受候故愚言テハ決而左様ニアラス神命トナレハ全ク奉事順從スルノ覺悟ナリ、雖然人ノ言フ理會シ難キ無形ノ説ヲ聞テ神命トハ甚以信用シ難ク却テ愚心ニハ天命ヲ不衷ノ仕方且ツ神意ヲ穢スニ當ラン歎ト存ス、餘論ハ略ス、遂ニ翌十三日「プロクトン出立ニ決シ夫ヨリ「モンソンと申嶋田始メ五生之許江見舞、始終之形勢モ委敷靜話ニ及候処、五生モ至而親

切ニ而共ニ同所ニ於テ滞学致度トノ懇言ニ預リ候得共、小生ニ於テハ折柄何分大ニ財ノ立ノ憂患モ有之者最初ケ様之訳ニテ不得止事渡米致候次第就而者旁苦心之義も不安、我朝ハ紛乱何レノ道ヲ果サント云テモ只今無財ニテ進退窮屈ニ迫リ候間、何分一先ツ日本之消息モ承知致度勿論不遠内我々共一列江も何ト歟君命モ可有之ト存候者夫迄者何卒當国ニおひて苦学致度就而者精々減少之処ニテ三ヶ月之間ハ要用之入費丈ケ取替之義も相調候得ハ無此上幸之仕合ナリト無和理相談ニ及ヒ候処、五生之返答ニ夫レハ至而安キ事ナリト旁叮嚀之次第ニテ同所江三日滞在致シ夫レ(種子島敬輔)吉田同道ニテ新約江参り越シ(二ニューヨーク)Mr. Foggs江五生学科之内ニ三ヶ月中被替候条談判ニ及候処、彼レモ能キ請合ニ而旁幸之都合ナリ、夫ヨリ吉田生トハ相分レ(二ニューヨーク)Dr. Ferrisト云人物江見舞學問ノ目的モ相咄シ教人ノ世話相頼申候処、同人実ニ叮嚀極リ直様取切テ都合致シ呉レ(二)ま)New Bruns-wickト申地ニ於テ滞学之賦ニ決定致居候処、永井も偶来ニ而其趣込も承(吉田清成)者有之國許江此度(ハリス氏ガ門ヲ断リ段々異論)リ候処、丁度同人ハ廻書以申上候通之形行ニ御坐候、是迄始終「ハリス説杯ニ付不及高遠之空論共□ニ唱へ學問之妨ケ致候事モ不少次第ニ而有之者此節モ其レニ打變ハリ何モ無益之高説共全ク取止メDr. Campbell(学校ノ先生)態々小子等之為メニ讀書致シ呉レ其餘通例之勉学モ旁都合克相運ヒ是レ則天導ナリト大悦不過之次第御坐候、然ル折柄豈ニ計ラン哉先月七日野田(鮫島尚信)、沢井俄然与帰国之決定致候由跡更承リ就而者小生「プロクトン(森有礼)出立以来時日ヲ不過可成速ニ僕ノ進退も申入含ニ而候得者猶又為念「プロクトン江残居候人数之決心モ之程モ再度問ハンカ為再三書状差出し候

も何タル一言之返事モ無之加之此節兩人帰国之一条モ全ク僕等之方江ハ報告不致旁奇怪千万餘リ無快トモ覺へ不申候得共、何歟彼等モ定而御國用可相助トノ熱意ニテ帰国致シタデモアラフト推察、若其義ニ而モ候て何卒志ヲ變セス誠実ニ其成功有之度ト望入次第方自ラ正邪之間ハ天命ノ歸スル所可有之ト無益異論ヲ止メテ待而已ニ御坐候、松村ニモ彼野(鮫島)、沢トハ不同意ニテ「ハリス氏ガ門ヲ出テ去ル二十六日爰許江来リ學問ヲ初メ候次第ニテ御坐候、右様御承知可被下候、當分□ケ様之長文相認候而者大ニ御多用を妨ル訣ニ候得共不得已事右之形行丈ケハ細々申上度、尤六月十一日之便ハ細情申上賦ニ而「プロクトン残居人数趣意之程も明白ニ申上度彼方江書状者認出候得共右通之仕合ニ而返翰一封モ不来候故不得止事僕等一同之書状延引之段ハ平ニ御海恕之程奉願候、先者右之形行早々如斯御坐候

恐惶敬白

杉浦弘藏

西曆

七月八日

岩下佐次右衛門様

新納刑部様

欄 外

於龍動佐次様江御咄申上置候通陸軍所江入校之義政府之方江相頼可日本

(ロンドン(出下)方平)

政府ヨリ引合ヒ無之候而ハ入校之義不相叶併幕府ヨリノ諸生ハ免許可出来トノ義ナリ、如何トナレハ彼方ハ英政府江頼込候訳ナリ、実ニ□□トノ事承、幕府之人又ハ薩ノ人トテ善悪賢愚ノ間タニ於テ□□相替ル義も無之筈ニ勿論今日薩マノ隔意ヲ全ク打捨テ我朝全國之為メ軍法ヲ立ル志ニ於テ左様ノ區別有之而ハ正大ノ王意ニアラス、是レ則チ幕ノ計策ニテ當時幕府之免許ナシニ洋航スル浮浪輩モ余多有之候而者其等之□□互如何様之事件□□致而も聞る免ルスコトナカレト頼入候由ニ被存候、餘リ徳川之家□□私ノ驕慢ニ重子王師迄も拒ム勢ヒニテ遂ニ今日之形勢ニ荅落実ニ天命ノ然ラシムル故歟ト愚案罷在候、扱右入校ノ一条ハ佐次様江形行御咄申上何れ御帰国之砌ハ御免相成候様御尽力之段頼置申候処、夫ハ随分成間敷事ニ而も無之能キ時宜も可有之との御返答候、昨年九月ハ陸軍校先生之所江引越居賦ニ而右之先生江□□ミ都合致置候得共、英政府免許次第直ニ入校致度候

二、畠山義成より仁礼景範・江夏蘇助・種子島敬輔・吉原重

重俊・湯地定基への書簡（一八六八年七月二十日）

玉章一昨日相達忝謹デ拜誦仕候、然者僕等此節帰国之一条ニ付御相談

御座候者

Dr. J. Ellis 之

申上候処、御賢察之趣委曲被仰付候通御尤之事共ニ而伏理不□覺候次第御坐候、可成ハ一統今尅二年モ滞学之義相叶候て國家之大幸何歟是レニ不過事ト喝望致候得共、何分不容易形勢ニ付御互我々共一列夫々可被仰付御用筋之儀も可有之候、此□□一同引取候様被仰付候義且乍恐も當時薩府内外非常之御入費ニテ前代未曾有之御疲弊歟ト奉恐察候得者不勘弁ニ送財之願望も近比不憚君命之重仕方ナレハ如何様とも一同今暫時滞米ノ方ニ粹思致候得共、頓与外ニ所置スル道ヲ不知シテ至テ苦心罷在事ニ御坐候、又今日國恩深キ臣子ノ情トシテ天朝多難之時ニ望テ誰レカハ王家ニ微命ヲ捧ケ無罪之萬民ヲシテ塗炭ノ苦ミヲ免カレシメ名分大義相立、政體簡易文武一途ノ公法ヲ以テ皇國ノ全疆唯如一家平治シテニツ無キ誠道ヲ以テ世界一圓□□而親睦交接應對スルコトヲ欲シ願ハサラン哉、方今我朝ニ兵備ヲ立ルモ全ク同国ノ悪人而已ヲ刑罰スル為ニテハ無之各洲ニ於テ賊悪ノ人民蜂起スル時はヲ征スルハ則チ神兵ノ武力ヲ以テ征討伐スルコソ正々堂々タル誠ノ神兵トモ可言乎、畢意今日萬民無字ニシテハ何レノ方ガ誠ノ道ト云事ヲ明白ニ不見分故時ニ望テ正邪ヲ争論スルニ至リテハ甚タ難キモノニテ古今各国兵端ヲ起スモ畢竟本ト此正姦ノ争ヒ又ハ互ニ慾ノ餘リ増長スル所ヨリ多クハ起レルモノ歟ト愚存罷在候、就而者富

國強兵ノ道ハ最當務ノ急タリ、併シ日本ニ於テ當時肝要ノ第一ハ議政所  
 造營并諸郡縣ニ於テ大小學校ノ設夫々誠道ノ行ハルル所第一ノ急務ト乍  
 微力遙ニ心願スル事ニテ成程開化ノ時ハ至リ候得共、未タ右等建立ノ時  
 ハ不至歟、併シ国乱相鎮候次第ニモ速ニ取仕立有之与是ハ頻リニ希願罷  
 在候、當時之形勢ニテハ如何程萬里隔離ノ外邦ニ居テ慷慨歎息スルトモ  
 益ナシ、何レノ筋速ニ成業己レノ職ヲ尽シテ天命ノ至ルヲ待而已ナリ、  
 就而者僕等モ実ニ當時ハ致身ノ時歟ト存シ直様国難ニ走セ帰リ御命令ニ  
 應シ乍不肖聊カ微力ヲ尽度存候得共、一先篤と及勘考候処、今迄遙々滯  
 米之諸生国難ニ君命ナリトテ凡テ此節帰国致候テハ外邦ノ事情モ不通者、  
 再航スルト云テモ非常之入費旁御国家ノ為メ無益之事ニ而且又己レ学業  
 未成當分之処ニ而国用可相勸程も難計、就而ハ今三四年も滯米勉学致候  
 至至愚ナカラ随分時ニ應シテ尽サル国家ニ報スル丈ケノ器モ養ハルルベキ歟ト頻リ  
 ニ心願罷在候、然者當時薩府御疲弊之事ハ僕等も飽まで承知致候事ナレ  
 ハ決而爰於テ入費之義官府江御願申訣ハ更ニ無御坐若右之年数丈ケ御許  
 被下ニ付而者随分自金ニ而非常之所置ヲ以可相調道モ有之候者、我朝出  
 国以来最早三ケ年費シ候得共、未タ成学之躰ニ不至実ニ慷慨此事ニ御坐  
 候、以後三年之内ニハ是非本統ノ業ヲ成度甚タ懇願罷在事ニ御坐候、  
 最初英着以来十ヶ月位ケ間ハ何モ疑惑ナク静ニ勉学スルヲ得候共其以後  
 何角之事件ニ付混雜通シ僅カ半年之間モ静学スル不能実ニ只今ニおひて  
 も憂心不安次第御坐候、右之滯米一条之愚存ニ付賢兄方之御賢慮と以後  
 所置被下度偏ニ希申し候、是ニ付而者未タ決定致ト云訣ニテハ無之候得

共、何分愚考之程も申上如何様とも諸兄之御□說ニ全ク順從仕度所仰罷  
 在候間、御賢□早目ニ得ル事ヲ得者何ノ幸歟是ニ若カン、扱又尊兄等如  
 何之御決定有之候哉、何分御賢慮之程承知仕度存申し候、実ニ大業未成  
 中途ニシテ上々出米スルハ誠ニ国家之為と云ひ旁粹思致候得共自決ニ而  
 ハ確然与目的も不据候者何卒御賢養ニ□シ拜面之上細事ハ御高談ヲ承度  
 存候 頓首敬白

西曆

七月廿

杉浦弘藏

(仁礼景範)

寫田

55 Church st.

(江夏蘇助)

久松

New Brunswick

(種子島敬輔)

吉田 兄江

N. J.

(吉原重俊)

大原

(湯地定基)

工藤

三、畠山義成より横井左平太への書簡 (一八六八年カ)

去ル十七日尊書一昨日相達忝謹テ早速拜誦然者嚴而者之砌無御痛御揃  
 愈御壯剛之由先ハ珍重不斜御祝賀申上候、扱此節御賢友ヨリ御書翰態々  
 御送被下取モ不敢拜見仕候処、関東ニ君子卓越タル必死ノ尽力ヲ以テ幕

府モ愈伏罪ニ相決シ前將軍ニモ上野之菩提寺ニ蟄居相成格別干戈ニ不血シテ降服靜謐之形勢ニ至ルハ嗚呼是レ誰レノ仁カゾヤ、二賢ノ武徳ナカリセハ無罪之人民Godヨリ受得タルニタナキ最モ重寶ナル生命ヲ落ス□幾千万ト云フ數ヲ知ラサルベシ、可仰可貴ニ忠ノ高德「時窮シテ節乃現」

「國家紛乱シテ忠臣顯ハル」其レ是ノ謂キ乎、然者於京地諸明賢侯并全國之人才有志之士集會愈言路モ相開ケ大政官モ正大公平之衆論ニ帰シ政體簡易文武一途之大典ニ基キ二百年來泰平因循 conservative 之弊風一洗弥善道ニ趣キ天運之然ラシムル開化ノ時ニ應シ行道當國強兵之実功相立時勢誠ニ以為國家御同慶不過之次第存申候、近比不肖之僕等不及ナカラ何分此上ハ京師ヨリ關東之御所置モ至而寛大仁恕之御取扱有之度遙ニ祈願罷在事御坐候、丁度之折勝、高木之両賢生ハ去ル□ Monday 20th = Mountain 江御出ニ而貴兄之御報告ヲ彼方江送ランコトヲ欲トイヘトモ貴兄方ニモ御返翰旁相為在候へは、若ヤ急ニ御用之義モ難計如何ハセント富田先生江も咄合候処、同生之説ニ者高木ヨリ壺封ヲ□レ其中ニ右之報告ニ付而者貴兄方ハ大意ヲ承得タル事之由ニ而其御方江差上候様富生ハ承候間長々熟談雖有之御返納申上候、俣御落掌可被下候

敬白

(横井左平太)  
伊勢殿

杉浦弘蔵

尚殊之外御返書延引ニ相及候処平ニ御海恕可被下候

四、吉田清成・松村淳蔵・畠山義成より在英長州藩留學生

への書簡(一八六八年八月十七日)

去ル七月朔日御認之芳翰當月朔日爰許え相達忝謹而拜誦先以諸雄御揃御壯剛御精学之由不斜珍重目出度奉存候、然者弊夫等も無餘義情合ニ而轉居ニ及ヒ候有様ニ而過日は大略ナカラ僂暴之次第共認差上候処、御驚駭之由且貴兄方ハ既ニ御発帆之日限等も殆ント相定リ候折柄全ク御意外之事件共□□候儘無御腹蔵申上何分ニも遅引之事ニ而定而御迷惑ニも可相成哉と恐察罷在候得共、格別時日も相後レ候ト云場ニモ不至随分都合克遙々御滯英之方ニ御賢決相成小生等も乍憚頗ル安心欣善之次第罷在候、殊ニ□□御懇情之御挨拶共承知致候、却而痛入次第覚申候、何分御出英以前ニケ様之形勢ニ相及ヒ直様御報告申上候義ハ□□今以猶更僕等ニ於テ何之幸悦歎是ニ若カン、萬一當國之御渡海之上右之事件共ニ及候而(是)は如何計乎貴兄方之御為メ苦心困惑可仕歎、畢竟兄等之誠心貫徹自然天命之帰スル處ナラン乎、此上ハ何卒折角御心静ニ御勉学之程所仰罷在候、陳而者乍恐三条公中御門卿并尊藩御末家毛利侯御執業之御為メ御着英相成候趣共承知致候、開關以來ケ様正大之御賢志邦家之御為ト云ヒ至微之僕等ニ於テモ御互ニ大慶不過奉存候、皇國開化之期モ実ニ此機會ト難有奉存候、追々新報之趣ヲ以テ本朝之情態遙ニ奉恐察候ニ諸明賢侯方并全國ノ人才有志之士京師之集會愈言路モ相開ケ政權王朝ニ帰シ大政官モ所謂正大公平之衆論ニ基キ政體簡易文武一途ノ主法ニ依リ二百五十年来泰平



因循之弊風一洗彌善良之大典ニ趣キ天運ノ然ラシムル開化ノ時ニ應シ行道強国教民之実功相立時勢循還誠ニ以至而御同慶奉存候、近比之新聞以又々東西非常之大合戦到来致候由共相見得無罪之人民是ガ為メニ幾千萬之命ヲ落スベキ乎、嗚呼哀井哉、時来ラズンバ此難ヲ救フコト能ハザルコトヲ何分僕等祈願喝望スル處一日モ速ニ静謐ニ相成追々可成諸侯之若君様方御洋航有之度其上我朝も彌確乎タル萬古不易之政法姿成尋而大小之学法モ諸方ニ於テ開成之実功當今第一之急務歟と心願罷在候、當国ニおひても別段之珍説も無御座候、當冬十一月ニハ大棟梁撰拳之入札有之賦ニ而當分ハ夫ニ付種々之評議も有之定而次之President(□□General Grunt 此人物へおのつから御聞及ニモ相成候へん當国ニおひて軍醫ヲ惣裁有徳之人ニ而此節最高名ナリ 即座スルベクトノ説重モニ有之候、(河北俊卿)(天野清三郎) 乍末臺川北、天野兩賢過日ハ御渡英相成候由去ル五日御兩氏之御懇書落掌忝拜仕之處何歟御趣向被為在候由承知首尾克御着後猶御壯健之筈奉賀候、おのつから後便御返簡差上ヘク申上候得者何卒乍不成合其中可然様御鶴声希願罷在候、先は右御懇書之御禮旁且御返報迄乍大略早々如此 頓首敬白

西千八百六十七年八月十七日

永井 松村 杉

五、崑山義成より薩摩藩庁への書簡(一八六九年五月)

一翰奉呈上候、乍恐益朝廷御安全可被為遊御坐恐悅不斜目出度奉存候、然者貴公様彌御清福御忠勤御尽力之由、是以大慶奉遙賀候、扱追々之新報ヲ以皇朝之形勢奉窺ニ王政御恢復御成功以來御政體都テ御改正且諸賢邦家之御為メ非常之御粹心以來旁以珍重之至奉存候、凡テ世界各州古今之時勢愚考仕ルニ治乱興廢之例御存之通り甚多シ、何地之国ト云テモ内乱ノ煩ヒナシニ開化セシハ未聞ニ御坐候、譬へハ紀元前五六百年間者「希臘国」其後「羅馬国」甚盛大ニ開化シ諸學術モ最モ巧ミヲ得、或ル造營術杯ニ於テハ當世洋洲技藝之上ニモ可出程之由ナリ、傳信機又ハ蒸氣車船類ニ於テハ格外、是等ハ古今無例之發明成業歟、「希臘并羅馬両国共ニ御存知通り其時分非常之英傑智勇之将士も餘多出世始終大小戦之後、遂ニ洋羅巴一圓ハ勿論「亜細亜半バヲ押領セシ勢ヒニテ其時ニ於テ甚々盛ンナリト云ツベシ、然レトモ當時ニ至而者甚々衰微致シ方今英佛米ノ開化トハ同日ノ論ニアラス、是レ則チ是レ盛衰ノ一例天道ノ然ラシムル勢ヒニテ人力ノ難及所ナリ、其以來近世ニ於テハ英佛共ニ邦内ハ勿論外国ニ於テ干戈ヲ動セシ次第勝ケテ不可数於モ米国同断、紀元千四百九十二年「Italy」一航海者「コロムボス」Spain」国政府ニ強訴ヲ以テ遂ニ全ク不明ノ大西洋之航スルヲ得初テ此新世界有ルヲ發明セシヨリ當地素ヨリ印度ノ人種ニテ随分暴勇極リ軍サ好キノ人民ニテ候得共、此「コロムボス」ニハ天マ下リ人歟之様ニ相像シ甚々叮嚀之會積致居候処、

其後段々洋羅巴諸蕃之人民當国之移住致候處互ニ失禮僥略之振舞等も有之、遂ニ洋人ト素ヨリ之米人ト数十年間大小戦之取合ニテ、尤其間々時トシテハ両方親和之事も有之居処、其後英佛ハ勿論其餘之諸邦ヨリ夥敷人民我先ニト競ヒ立渡米「Mexico」并「Spain」杯大小戦之取合又者界ヒ之論杯ニテ於當国英佛互ニ干戈ヲ交ヘシ事共実ニ数不知、是ヨリ大凡ソ九十年以前華盛頓非常之英傑ニテ出世加之其時分有志之士彼レト共ニ力ヲ合セ一向國家萬民ノ為心身ヲ尽シ英王ノ無道暴盛ヲ惡ミ、遂ニ米國獨立ヲ名乗リシ以來英ト大ニ戦ヒ敵ヲ退ケ其後米國ハ全ク公平寛大ノ政體ヲ姿成候、追年彌開業致シ近世国内軍サ之最モ大ナルハ此前之千八六十二年ニ相初リ候擾乱ニテ四年ケ間南北二ツニ相分レ頻リニ大軍差起リ彈丸ノ為ニ数千ノ人民ヲ殺傷スルモ亦哀シカラス哉、併シ双方ナカラ社稷之為メニ已ムニ已マレヌ無慥情合ト承事ニ御坐候、此軍サハ大ニ米國之為メニ益ヲ成セリトノ説亦御坐候、共和政創業之大統領「華盛頓」ヨリ當春統領職ニ國民之撰挙ニ依テ即キシGrant 迄大凡ソ九十年ケ間十八人之統領ナリ、此□Grant 二者以前之争乱ニハ勿論北軍ノ惣大将ニテ國ノ為メ粉骨ヲ尽シ実ニ大功ヲ立シ人傑ニテ當時之勢ヒニテハ甚以高德ナリ、米國ハ後年彌隆盛榮幸セントノ事ニ御坐候、ケ様國家紛乱シテ後漸ク今日洋米洲靜謐之形勢ニ至リ候訳ナレハ時窮シテ一度ヒ干戈ヲ動セハ人民泰平安佚因循之弊風一洗清潔スルノ道理ナレハ當時ニ至リ天運順環ノ里國起ルノ時来リ多恐モ天朝非常之御英明 并公卿諸賢侯太夫此節御創業追

往テ遺ラザルハ無之開成運細出テ又本トニ遷

ルハ是ノ謂乎  
々正大之御處置共承知仕リ数ナラヌ不肖等ニ於テモ遙ナカラ本邦之御慶

事ヲ奉祝之心情是程隔波之事ナレハ猶更深ク相覚申候、御賢察可被下候、隨而僕等爰許え罷来リ候始終之事情ハ昨年之夏比岩下様え申上候通□仁

禮、江夏ヨリモ細情申上タル筈ナレハ別段外ニ相替ル義も無御坐候、兩

輩帰国之砌御存知通り僕等頻リニ財金之儲へ無之進退窟窟ニ迫リ苦心之

程言語ニ絶セリ、夫レ故不得已事Dr. Ferris と云人物え是ハ自号御間及ニモ相成候半當時時時歸滞在致シ米國

出掛ケケ様く之訳ニ候間何卒五六

ヶ月ケ間日本ノ財件ニ付一左右ヲ得ルル迄洋銀ニシテ一ヶ月ニ四十五枚宛

借財致義ハ相叶間敷哉と相談ニ及候処、同人懇コロニ請合ヒ其通り約ヲ

定メ、併シ彼ラモ商人之如ク別段富家ニテ無之故、段々朋友富人之仲ケ

間ヨリ才覚致シ乍漸小子共之相續ケ居ル間私共も学校ニ入ルヲ得勉強致

シ、氣之毒ナキニシモアラス、仁、夏之一左右今ヤ遅シト相待程ニ時居候次第御坐候併シ

至リ尤モ杉浦ニハ少し愚考之趣有之、夫レハ岩下様へ被申上通り之趣意、彼両生えも帰朝之期細細歸郷候得ハ自ラ御間取之筈ナレハ略ス、是も如何薩府之方ニ而御所置ヲ承ル哉と案シ折角寛大ニ何も六ツケ敷無御免相成度と折願何分之処置ヲ得ント願

何れハ仁禮ノ一封相達其趣ニ者兵庫え着スルト直ニ小松様え参

シ僕等も歎願之趣も御咄申上候処、最早幸ヒ□□之處外国諸生ニ於テハ

大政官ヨリ御扶助被成下且海陸軍入校之一条モ米國政府え御懸合可相成

筈と事共なり、最々Rev. Mr. Verback, Dr. Ferris 一ノ所ニ差送り候昏

面ニも態々小子等之為メ大坂迄出張小松様え對談申上候一条細ニ名前迄

も申来リ候間、定而大政官ヨリ之御達シモ遠クハ有間敷ト正月初末比ヨ

リ飛脚船着毎ニ此節者々と始終相待候共今ニ一向何タル事モ御命令無

之故、此事件何處ニ滞リ居候哉と甚以心外之次第御坐候、然ル折柄右之  
Dr. Ferris ヨリ差送り候月限モ昨年九月ヨリ當正月迄五ヶ月之間既ニ相  
済且當人も決而不遠内日本ノ之一左右も可有之と頻リニ待居候形勢ナレ  
バ、左様又初メ之約定も違ヒ押而借り重サメ之相談ハ甚以斟酌之訳モ有  
之、尤其間ダニ Fogge 是レハ大原、吉田杯ガ方ノ金  
種ヲ預リ候一人ノ大商ナリ 方え四千枚差送り相成候ニ付、大  
政官ヨリ何ト歟御達ノ有之迄ハ右之金ヲ大原杯ト共ニ相用ユベク、尤其  
段者汾陽氏えも申出置候間、右通可被斗様仁禮旨申遣候間、右之 Fogge え  
吉田、大原も出懸ケ仁禮申遣候趣篤と咄合ヒ小子等も當時大ニ困窮致  
ニ付要用丈ケ之金ヲ是非小子等の方え差送度旨頻リニ道理ヲ述精々向ニ  
も迷惑不致至極之礼讓ヲ以致談判候得共、此 Fogge 事随分不賢不仁之商ニ  
て中々以請付ル之勢ヒテ無之薩府ノ小子等の方え別段送金可致トノ老議  
ヲ不得内ハ決而不相叶、何分次之飛船迄者可相待ト之返答数度ニ及候故  
ニ彼等も致方なく判談之形行委細小子共え申遣候、夫ニ應シ僕等も暫時  
者扣へ故国之一左右有ランコトヲ頻リニ喝望致候へ共、何ノ消息モ無之  
故実ニ已ムヲ得ス再度 Fogge 之談判ニ及バント思ヒ立、尤小子共之考ニ者  
此以前御免ナシニ薩ヨリ五六生當国え渡海致候砌、ケ様ノ之輩脱走致  
候ニ付商人え對シ金子方寛等之義も難計萬々一ケ様之事有之ニ於テハ決  
而許ルス事ナカレトノ新聞も有之候ニ付、定而彼方考ニ者僕等者右之一  
列ナラント疑念モ可有之歟、然レハ此節ハ我々共直ニ差越シ内情之程篤  
と明白形行ヲ述へ彼ヲシテ我等之状態ヲ理會セシメ是非初之趣意ヲ遂度  
早速彼之役所え罷越候処、折節彼レハ留主ニ而唯書役頭取而已立合用向

も有ラハ如何様とも承知せんとの事ニ付、此方ノ者全ク無理失敬之躰ヲ  
以テ相談スル訳ニ而者無之唯望所者如何ニ考候而も決而外ニ所置スルニ  
道ナク何レ之筋足下之来リ秋毫ノ隔意ナク懇コロニ相談スルコソ理ノ當  
然ナリ、最モ足下商法ノ為メニモ甚利益ナリト存ス、如何トナレハ近比  
於長崎 Robinet 是レハ御間及ニも相成候半數本ト船將役ヲ  
相勤メ當分ハ足痛ニ而其職ヲ辭シ候由ナリ 江相應之金高差送りタルト之壹封  
薩摩之 officer 之儀ニ相□、加之島田仁礼景範も足下請取シ財之中ヨリ学問用ニ  
可致と長崎滞在之汾陽江も委細申出置タルトノ趣証書遣置候間、必ス疑  
念有間敷等之事ヲ始メ言バヲ畢フシテ一向頼入候得共、実ニ哀哉商人  
之習ヒ彼之言ニ者遂一尤之義ナリ、我等之内情モ委曲理會致シ候、併シ  
事ノ六ヶ敷ハ未タ Robinet より夫レ丈ケ銀高ヲ請取シ一左右ヲ不得故、  
幾重ニも氣之毒千萬ナガラ相談之一条請合出来難シ、然レトモ近日中日  
本ヨリ飛脚船到着之筈故若シ夫レ迄何タル一左右も無之候ハハ當分 Fogge  
ハ旅行ニ付帰宿之上何分取究□□事可致との趣ニ而其以後尅々月位相待  
間ニ飛脚船到着再度ニ及候へ共、僕等二者一書モ不得実ニ進退困窮所置  
スルニ道ナク失望之為躰御遠察之程奉仰候、学問中ケ様之節数々望デハ  
頗ル邪魔致之次第御坐候、是モ則チ在天之真神僕等江賦リ付給フ事ナレ  
ハ、決而苦勞ニハ覚ヘス、譬へ明日ハ餓死ニ及フトモ今日為御国家愚夫  
ノ職ヲ勤メ大道ヲ踏マへ候得者、却而ケ様之苦難ハ甘シトシ日々之決心  
ハ出来明日ヲ頼ムノ意識も失セ、大キニ幸安心仕リ候次第御坐候、然ル  
折柄 Fogge 之方ハ静リ帰リテ音トモセス、此上も又強而彼江右之相談催  
促致候義、小子等之恥辱ハ勿論却而日本之御名目ニも相抱ハル訳ナレハ

彼レト談判之一条先ツ取止メ居候処、Boston住居之富商Mr. French是レハ別紙ニ

上候申近日中日本再航之趣承リ、吉田ハ我々共江申越ス趣ニ者、財件彼ノ

French江相談致候而者如何ト之事ニ而候、僕等之考ニ者甚宜敷ルベクト

存シ直様此方ヨリノ返答ニ者右之一条ニ付此方ハ差越度候得共何分遠方

ト云ヒ米里ニシテ大抵三百里困窮ニ者迫リ学問中ニ而閑暇ハ得ス、旁不自由之事故此々

六ヶ敷併シ幸ヒ吉田種子島敷補杯滞在致しMonsonハ僅カノ路程ナレハ格別入費モ

無之旁之処ハ何卒French江出張リ僕等之趣意も述ヘ大抵洋銀二千枚才覺

致呉候様申越之処、French素ヨリ日本人之事情ハ克ク察シ加フルニ此々

歎願ノ趣者有之甚タ以テ親切極リ快ク相談之一条請合直様洋銀錢ニテ二

千枚僕等之方江差送り候故、諸事之都合至而幸之仕合ニ而御坐候、然レ

ハ昨年八月以来Dr. Ferris方ハ僕等三人之入費洋銀七百六十五枚借用致

候間、則二千枚之中ハ返済其余五ヶ月位相滞候宿舎之入費者早速相拂候

ヘハ餘財ハ精々儉ヲ加ヘテ大抵三ヶ月位も可保歟ト存申候、何分偏ニ願

ハクハ其中何ト歟日本之一左右モ有之、財着之程頻リニ喝望仕候、扱右之

Frenchハ借財之一条ニ付而者當時御國家之形勢も前後深ク勘弁ニ申候

處、頓と外ニ取置スル道ヲ失シ全ク進退困窮ニ差迫リ致方之なきよりシ

テケ様之決定仕候間、何卒御上江可然様形行御賢慮ヲ以テ御取成シ被下

候ハハ別而幸之仕合奉存候、左候而French此節ハ長崎江不差越候ニ兵庫

大坂江参度ト之旨ニ而右之二千枚ハ當人着スル十五日之内ニ者是非無遅

滞返済致呉ル様彼ハ望ミ之事ニ而固ク約定仕置候間、何卒其日限之内ニ

御返済相成様御周旋被成下度偏ニ伏願罷在事ニ御坐候、米國ニ於テハ今

日政治家モ商人モ細工人モ皆同均之権力有之全ク士農工商之上下區別ハ

無之、全躰諸民ノ風俗金件ニ甚賢キ世界第一ト見シメ申候次第御坐候、

夫故ケ様財難之砌ハ餘程親敷知人も無之テハ鳥渡於日本之仁德之情ヲ以

財金デモ互ニ取替スル或ハ借用等風俗者先ツ稀レニテ、併シ此教師仲ケ

間ハ一躰萬民ノ為メニ尽力、童子童女之教育又ハ貧民ヲ救助スル等之法

ニ至リ而者甚克行届キ実ニ可賞美風俗之一ナリ、

一先比Mr. Verbackハ小松様御談判相成候、表向キ大政官ハ當国政府江

御懸合海陸軍所入校等之一条ハ其後何タル事情も承知不致、定而御國家

未タ静マリ兼子當政府江御懸合ト決ニ不至哉ト遠察罷在候、當政府之方

ハ既ニ合点致シ最早此上者日本政府ヨリ御相談相成候ヘハ決而六ヶ敷義

ハ別段何も無之由承り候、定而只今比ニハ早ヤ御談判相濟タル哉トモ懸

而存申候得共、萬々一大政官之御方ニ而何ンゾ此一条ニ付御差支え御吟

味も有之候得者、何分之事情御洩シ被下候得者甚ハ幸之仕合奉存候義者相叶間敷哉、如何トナルニ

小子共滞米之間若シ何歟遮タル決モ有之迎モ本統之海陸軍入校之義雖被

行勢ヒニ候得者矢張り只今罷在候大学校ニ而軍備之外者何モ充分古今之

諸国語ヲ始メ天文究理測量并地理学等ニ至ル迄モ何モ不足ナク己レノ欲

スル所ニ從ヒ學術出来、畏モ只今之処ニ而帰朝之御命令サヘ不蒙候得者、

是レヨリ二年目ニ者業之賦ニ御坐候、ケ様御國家御多難之砌ニ外洲

ニ於テ尚滞学之義も近比奉恐入次第時シテハ慷慨之心不淺候得共、静

ニ克々愚案ヲ廻ラ學業未成之不肖等只今帰朝致候而格別御國用相勤

マルベクトモ覺ヘ不申、成程外人江對シ談判旁又ハ洋米洲通常之事情觀

察等ハ免モ角モ、只今ヨリ日本ニ於テ諸學校之教ヘ又ハ海陸軍校之設ケ  
随分出来ルベク程之大功業不成シテハ邂逅當国迄難有モ、人ニ先立チ御  
国家万民之為メ微命ヲ抛チ洋航致候其詮モ無之次第御坐候、最ケ様區々  
タル小見識ヲ以テ大志モ遂ル不能時勢ニ應シ帰国共致候而者、却而不肖  
之僕等ヨリシテ御國名ヲモ汚カス訳ニモ相當リ候得者、可成ハ今暫時之  
間タ當地江潜マリ学問致度御坐候間、是又御賢慮ヲ以テ何卒不悪ル様御  
汲取可被下候、當分者爰許江勝子并越前生八木太郎、肥後生横井兄弟、  
近比再航致候勝房殿之門人高木、富田モ同郷江罷在何れも大元氣ニ而勉  
学ニ而僕モ横井両生ニ於テハ海軍入校ノ御免許一日も速ニ御達シ有之度  
と專ラ希望ニテ滞学ナリ、何卒無滞右之御指圖到着之程、僕等も頻リニ  
奉待次第御坐候、御序之折毎月之大政官日誌御差送り被下候ハハ御仁恵  
之程難有奉存候、先者前後至而僉略之文面御失敬ナカラ右之形行込得尊  
意度如斯御坐候、恐惶謹言

千八百六十九年五月

六、伯林之助・毛利親直・福原親徳より畠山義成への書簡

(一八六九年六月二十一日)

六十九年八月六日 於New Brunswick N. J.

龍動滞学生伯林之助、土肥又市、芳山五郎之介の諸生之書状之写左之通

爾来絶不奉伺御起居疎遠失敬奉甚弃候、實ハ昨年御地御滞在御□之諸位  
御帰朝之御様子傳承仕候□、今日ニ及候處析柄御地滞在之由、越前藩生  
ヨリ之書中ニ有之御盛ニ今以御留学之由(不明)奉賀候、然者當地堂  
上方并徳山世子孰れも御壮栄御勉学ニて小生等無事罷在ニ而不憚御懸念  
被下間敷候、將又近来本朝稍静謐次第ニ郡縣制度ニ及候段大悦御同慶  
此事ニ有之、其他何歟形勢御聞及も御坐候て被伝聞度奉希候、□□之御  
同込得貴意度如新ニ御坐候、其内隨時御□□為國家是祈

頓首敬白

六十九年六月廿一日 長越生之三名

二白、孰れ□丈ケ御帰朝相成候哉不洋之□□御連絡不仕候間御滞在之列  
位江可然様御傳□□□當地朋友中も宜敷様申呉候様との事ニ御坐候

七、畠山義成より種子島敬輔への書簡(一八六九年八月二日)

一昨日之貴芳同夜慥ニ相達シ謹而拜誦之處、永山義問合偶着何とも御同  
慶千万不斜此事被存申候、早速御達し被下候、□忝ク奉存□□候、僕等  
ニも殆ンド彼二千枚尽シ果ント欲シ精々天父之Providenceヲ祈願喝待罷  
在候折柄、ケ様之消息被得ル義実ニI thank God for his answer○先日  
者箱館又ハ松前邊ニ於テ官師の榎本征伐之新報有之候、是亦good news  
ニ而自ラ早ヤ御覽之筈と存申候、おのつから御存知有之候半、彼榎本ニ

者全ク blind ニ而者無之蘭国ニ於て五年ケ間学問致シ勿論其時分蘭国滞学  
 生之中ニ而者最モ才識有ル一生夫ニテ、随分量見も有之、仕ヒ様ニ依テ  
 ハ useful creature ナリ、彼レ最初之振舞者旧幕廢セラレシ以来不得已事、  
 寄る方もなき荒磯之舟ニ而幸ヒ小笠原□□様と一所ニ結ヒ付ルその島ニ  
 投キ付天命ニも不依先見も無之候、一向己ノガ才業ニ誇リ旧幕姻循矇昧  
 無志之人民ヲダマシ、徳川家之御為メニ抛身命是非再度創業ヲ謀ラン、  
 就而者「エゾ一圓ヲ押領シテ日本被攻ムベク杯と廣言ヲ咄キ□□辱シメ  
 ラルル時者臣死ス杯と語付唱ヘテ兵税金財ヲ乍徴集積□□被得一旦群島  
 集會致シ候も此節半日之砲丸ニ魂ヲ飛バシ皆瓦解、嗚呼哀ヒ哉無罪之人  
 民被殺傷スル事ヲ此中ニ最モ恥辱ナルハ是迄北賊ヲ助ケ居シ佛之三狐ナ  
 リ、日本之国法ヲ以て見る時ハ王家ニ向ヒ干戈ヲ取ル者ハ天地ニ不可容  
 大罪人之由候ニ付共、當時賢明之（不明）世界普通之公論被相立候砌ナ  
 レハ要□寛仁之御所置ヲ以て暫時之間ダ遠島歎又幽閉ノ□□リニ而も事足  
 リ有舞歎と存候、先度も何卒彼徒黨征討之時者其刑ヲ輕クシ刃バ血ヌラ  
 ス様差過タル事ナカラ御所置有之度と我朝之朋友江相認ル事ニ而候、○  
 先比御懇切ニ依テ漸ク二千枚之扶助ヲ得シ処、直ニ其中昨年八月以来「  
 (J.M. フォーリス)  
 ヘリス方ヨリ僕等三人之入費洋銀七百六十五枚借用致候間ダ夫レ丈ケハ  
 返済、其余五ヶ月位相滞居候宿舍之入費并学校之 tuition for two terms  
 that is six months ニ五十枚程相拂ヒ其餘財者□□俟ヲ加ヘ候処、漸クナ  
 ガラ今日ニ至リ松村ニ者六十枚ノ□□ニ者十七枚程保財仕候次第御坐  
 候、○Nagai left here for Wilbraham Aca. on last Tuesday 27th &

he had about 50\$ & he told me <sup>us</sup> that young Thomas said that  
 he would borrow 50\$ more from his acquaintance for Nagais  
 movement & he said in answer yes. That is all what we know  
 about his money before he left here & since we haven't heard  
 from him yet, whether he reached Wilbraham. ○永井生<sup>(吉田清成)</sup>之proposal  
 that "The self support that he might lecture on Japan" at diff  
 places to wh Dr. Cunning would introduce him. & there the  
 hearers, according to their free will, might give some money by wh  
 he might support himself for some while & c. ニ付而者第一我政府  
 ヨリ金財ヲ不送所ヨリシテ不得已事其訳ヲ説ヒテ人ノ危害ニ預ルヨリハ  
 今暫時之間相待候へ官府送財成否之一条モ委曲承知之上右之決定ニも相  
 成り候ハハ當学校Faculties江對シテも充分之道理可有之、若シ又其レナ  
 クハ彼方ハ West College ナレバ大方methodist之people何角之都合も  
 宜敷尤諸先生等も親切ニ付旁彼方被好なりとの事なれハ尤至極之論なり、  
 併シ當時日本国内非常之繁用ニ付精々望シながら未タ送財と云ニ不至ニ  
 付待兼子唯money之為メ其意と枉テ轉機ニ及モ近比口惜キ次第今一先ツ  
 官府ヨリ之問合も相待候而者如何候や、僕ニおひてハ御存之通りケ様ニ  
 併シentirely I trust myself sacrificed in the hand of God who has  
 a most infinite mercy upon his children, therefore I am very  
 happy & thankful to work my duty for the Lord here at present.

We must bear any trouble whatever may be in a cheerful state

because each of us was given certain happiness & trouble by the

Creator. & c.

一長沢義二付而者先比も杉浦御咄申上置候通日本へ送財之都合相調次第(長沢鼎)  
二者早速彼方江差越Harris并Oliphant江面會ヲ得篤と當時日本政府之御此節 appointment  
所置且ハ愚存之程も細情談論説破ニ及ヒ充分ノ道理ヲ立候ニ付、其上長  
沢ハ直ニ彼地出伴ヒ来リ申度切志漸ク只今比迄断然と堪へ忍フ事ヲ得候  
折柄ニ而、此節コソ者乍不肖右之官金相達候得者一日モ早ク彼方江罷越  
此任ヲ相勤度、就而者右之官財も此次之 *man* 定而相達シ可申候へ者、  
格別間も無之故、彼問合者其時一所ニBrocton江持參致シ右之談判ニ及  
ヒ是非此志願ヲ遂度決意ニ御坐候、尤僕彼地出立之砌悪言も不憚咄事尤  
争論も不出 *except a few friends* 何歟至微之趣向違ひニ相成リ、僕二者  
矢張り彼ノSwidenburgianヲ信用シ其 *member* ニ仕ハ致シ諸事 *corres-*  
*ponding* 等ヲ今取り候哉ニ理會致ニ生も有之、時トシテハ甚ダ懇切ニ僕  
之 *case* ニおひてハ互ニ *love* 之有様ニ而彼地出立、其後Harrisan僕ガ名  
ヲ呼デ尚ホ *New life of brotherhood* ニ仲ケ間致し趣理會相成候由、就  
而者未タ (不明) 之□様候間Harris江對シ彌欺偽巧悪之者ト志封デモ遣  
シタラバ甚可被宜敷ト頻リニ *persuade* スル人モ有之、愚存二者数ナラヌ  
不肖對シケ様之事迄氣付ヲ取リナル程親切之 *persuasion* ヲ預リ候義、甚  
忝ク相覺候併シへながら、僕之心底ハ夫レニ同意シ難ク、如何トナレバ「プロ  
クトン出立之砌」ハハリス之教ヲ聞事ヲ断リテヨリ段々異論モ差起リ候へ

僕ニハ一決而

不肖尾指ト云ハレ

共、夫レニモ僕遂ニ彼門徒ト交リヲ絶チ出立致し訳ナレバ勿論悪聲ヲ出  
ス者 *quite unnecessary* と存シ古語ニも有之候半哉「君子交絶不出悪声」  
右之形勢故定而不肖二者彼「プロクトンSpiritualism」ニ全ク信用致スト歟  
或ハ彼ノ欺教ヲ知りナガラ事ヲ温和ニ謀ラント前後之勘弁因循流ルル杯  
ト疑察致ス人ガ歎モ難計候へ共、在天真神眼分明多恐も至而不肖之心意  
丈ケハ上帝克ク被相知リ願ウ筈ナレバ愚身ニ於テハ如何程人ヨリ狂人ト  
云ハレヨフガ又ハ大馬鹿者ト云ハレヨフガ是コソ *right* ト心意シ不落内  
ハ秋毫も心ニ關係不致時来ラハ、是非此趣意違ヒ之根源ヲ探索致度義ニ  
彼等間違ニテHarris 込も右通僕未ダ彼之門下之様理會も有之候て面會ヲ  
期シ、何レ之筋僕決意之程至而細詳ニ述度覺悟ニ而、漸ク日本ヨリ一左  
右之有迄待付忍事ヲ得者、其中ケ様 *sinful nature* ニ依而改悔之心甚深ク  
Praying to God, our Heavenly Father that He would keep me safe,  
and send His Spirit to lead me into all truth, that I may not be  
led away into error, but study the scriptures for myself, praying  
for His Spirit to enlighten my understanding, so that I may come to  
have a saving knowledge of Our Lord Jesus Christ. And I have been  
*meditating & thinking* so much until this time. 只今ニ至リ天父ノ  
御恵シを以諸事己ノ職掌明白ニ見る事を得、何も安心致シ幸福之至リ幾  
重ニも難有覺へ申候、己レ其道ヲ不信トテ唯無理無法ニ *sectarian feel-*  
*ing* を以他ノ宗旨ヲ怨敵之如ク誹謗悪聲スルハ愚存ニおひて *perfect*  
*right* トハ決而覺不申候、信用





兄日下部兄二者當分未ダ帰宿無之候、先者右之形行辻遣以テ如此御坐候、

頓首敬白

杉浦弘藏

西千八百六十九年八月十七日  
我七月初旬

八月二日  
種子島敬輔  
吉田彦様

松村、永井、長沢、吉田  
大原、工藤、杉浦

八、松村淳藏・吉田清成・長沢鼎・種子島敬輔・吉原重俊・

湯地定基・畠山義成より永山源兵衛への書簡（一八六九

年八月十七日）

大坂  
公用人

永山源兵衛様

西千八百六十九年八月十七日米賢ヨリ

去ル我已五月二日之御問合西曆八月朔日大凡ソ我六月下旬ニ當ル「ホツグFOREG」之方ヨリ慥ニ小生

共江相届キ候俟ニ謹而拜見仕候處、洋銀三千枚右者洋行人數御宛行之義

都而朝廷御構被成下候筋ニ御決定相成居候得共、當夏比辻之間者朝廷ヨ

リ御振有之御都合ニ不至候付杉浦弘藏大原令之助之処其内者是辻之

通御國許御構工藤十郎儀者以來迎も全ク御國許御構ニ而御宛行金不被

差候而者不相濟段ニ云之趣委曲難有奉承知候、尤モ「ホックヨリ壱封

小生共江相認め候趣ニロビネットRobinetヨリ壱封届候其趣ニ大坂ニ於ヒテ金ニシテ洋銀三千枚

相届候ニ付、早速兵庫ニ於ヒテ米國江差遣ス為替之都合致置候間右之員

數相届次第可請取と之義ナリ、就而者次之飛脚船ハ定而相届ベシト折

角當月末之飛脚便ヲ待居申候事ニ御坐候、自ラ其節者一左右可申上候得

九、畠山義成より横井左平太への書簡（一八六九年八月

二十四日）

先達而者至而御懇切之御翰被成下慥ニ相達シ謹而拜見仕候處、彌御精  
励御進学之由、先以大慶不斜奉賀候、然處小僕二者此体行ニ任事成之度  
事ハ大抵終リ夫故、其砌高雲師之許江見舞ヒ夫レヨリ続而 Prof. Mar-

shall 之諸招ニハリ彼江兩日滞在、其翌日者 West Point 之近邊

Lona 島江 excursion トシテ差越シ是ハ Saturday 14th of inst. ニおひて

（サトウ）新克約江出府致し翌 Sunday 者 Plymouth Church 江差越、夫ハ平理

諸師之招キニ從ヒbefore last Monday The 16th ニ爰許江参着致候處、

勿論御存し通其時分者日下部先生御出ニ而當分ニ至る迄も御壯健ナリ、

Mr & Mrs. Mack 其余之□□杯実ニ非常ニ懇切之念積ニ而不調法之僕ニおひてハ失禮之義も不少筈と却而痛入程之事ニ御坐候、此□家族之須徳禮讓温和不少而事ハ大兄右以御存知之事なれば格別申上ルニ不及候、扱僕爰許ニ着雖直ニ可伺□□筈之處、日下部先生之御口葉ニ而ハ大兄近比爰許江御來臨之様承知仕先心待申上今日迄然□候次第遅引之罪平ニ御宥免之程所仰罷在候、賢兄之尊意通り小僕ニ者當所四方草木□ニト□□シ□新□ヲ甚□好仕候、○勝君(勝小鹿)も先日 Lake George の御帰リニ而當分(全妹)爰許江御滞留御壯榮なり、及び松村(松村淳庵)ニも参り随分にぎ／＼敷甚愈快ヲ尽シ候次第御坐候、僕ニ者大概其内來月初方までハ當地滞在仕度含候半候、願ハクハ大兄若シ其御許ニ而御学問も既ニ被為濟爰許御出之都合ニも相成候得者、小僕ニおひて得拜顔承何ノ幸歟是ニ若カン、御閑暇次第何分之御□様御越シ被下ハハ別而難有御坐候○去ル廿一日之新聞ハ自然□之□□へ我国内之合戦も既ニ相止ミ萬端静謐之□様(形勢)ニ付一橋公モ江戸ニ於テ此節大政府之御命令須道ニ御踐職之御承知共被為存候事件共□実説ナレバ邦家御為至而御同慶之次第御坐候、乍憚被好(不明)存シ興廢ニ係ハル肝要之時勢(秋)ナレハ、何分此上者有徳仁賢之英傑上ニ□リ彌正明寛大純公之政事施行ニ相成、一日も速ニ萬民各在天之神靈ヨリ受得タル其職掌ニ從順シ心意才能智恵ヲ耕作開学致シ正大之道ヲ踐シ井蛙ノ見御知識ヲ世界ニ求メ、誠実ニ神教ヲ脩業スル賢良淳徳之各国人民ト不朽之交親ヲ深く共シ益強國之基志ニ尽力スルハ御互之任ニシテ他アラス、併シ僕□□ニおひてハ御存通、ケ様區々タル小見識並此疲篤ニ命ラレタル丈ケ

ノ無智無能ニ而大志モ不立如何之最モ急務ノ急タル事業成行可相叶哉と二六時中只管真理之救助ヲ切ニ祈願スル而已、何れ□被為之末ニ者御賢弟首尾克御帰朝之御福音も可有之、外タル亦少シハ神州之事情新報此節共ハ可有之歟と希望罷在事ニ御坐候、先者御懇書之御□□御安□御宿まで差上如斯御坐候、書余者期後音候、頓首敬白

八月廿四日

伊勢様

一〇、新報略記(一八六九年八月一日)

横濱ヨリ千八百六十九年六月廿九日我五月廿一日又ハ之日附ケニ而花盛(ワシ)頓府江報告之新聞有之候ニ付序ニ任せ而比歟々翻譯致シ略訳左之通御覽ニ□候、此中ヨリ追々榎本黨之武威箱館ニ於ヒテ彌盛大之由ナル説有之、就而者外人之勘考ニハ日本大政府ヨリ早ク之ヲ征討之處置ナカリセバ後日ニ到リ段々ト根強ク相成リ些征伐難義ナルベクニナゼ箱館征伐□□ニ相成候哉、一向不相分如何サマ大政府未タ国内ノ繁事ニ彼ノ榎本黨之所置ニ手際スニ時ニナク少シ延引モ長シト皆□致居候折柄大政府之海陸軍凡ソ過キシ六ヶ月ケ間青森江ニ於ヒテ屯集克ク三軍ノ兵氣ヲ養ヒ陣列進退熟練之後、遂ニ榎本黨ヲ征伐之義ニ決シタリ、○去月十七日日本蒸氣艦 Albion (アルビオン) 箱館ニ向テ青森江ヲ出帆ス、尤モ其節ニ至リ忝クモ箱館立合

之外人ニ對シ同港ニ於テ發砲戰爭候間々其地ニ在留スルヨリハ寧ロ立去  
 ルベシトノ相□指示有之候故多分者同船ヲ引退キ各之諸艦江暫時之間タ  
 止舶ス、○翌十八日大政府之軍艦二艘「ヤンツ井」「大坂陸兵ヲ運送シテ  
 即日松前ヲ乗取、○統而夫レヨリ二日之後官軍進而関ヲ取ル、官軍勝ニ  
 乘シテ彌武威ヲ振ヒ箱館ニ向テ直チニ陣ヲ進ム、○松前之戰爭ニ於テ榎  
 本之軍兵各兼而之覺悟□モセス見事之戰功無之僅カ半時も戰ハザリシ、  
 早ヤ陣列破レテ皆敗走シケリ、散々之躰ニ而乍漸関逃レ是ヲ留ムルコト  
 ヲ得タリ、○北軍之徒黨大凡ソ百人位之戰死ナリ、生擄底休シ徒□亦同  
 数ニ及フ、○佛之海軍士三人事有之テ退職シ其後右榎本黨も箱館ニ於テ  
 ニハイリ加勢致之処此節耆人者底ヲ業手生取ラル、外武人ハ佛之砲艦  
 Caetagon 込漸ク逃レテ辛キ命ヲ助かり遂ニ横濱ニ到ル、○佛国之全權  
 彼ノ生取ヲ請取ランコトヲ日本政府へ談願ス、然レトモ日本政府不許之故  
 ニ佛之全權ヨリ再度押而最後之談判ニ若シ右之生擄ヲ大政府ヨリ返シ與  
 ヘザルニ於テハ直ニ江戸ヲ砲火スベシトノ事ニ而不得已事日本人彼ノ生擄  
 ヲ佛ニ返ス、翌十九日官軍競フフ箱館ニ進ム同時ニ海上ヨリ軍艦亦箱館  
 ヲ砲火ス、○去ル廿五日之折箱館ニ向テ出帆セシ米国之蒸氣船 Isoquois  
 注進ニ者箱館之都會ハ既ニ官軍之為ニ取ラレ加之徒黨之張本榎本ニ者失  
 望之躰ニ而上田之砦ニ引籠リ今頓と謀計モ尽キ果テ生擄ニ成ル歟又ハ降  
 伏ニ出ル之外無之との趣なり、○動乱ニ付北軍之働キ外人之可補員初之  
 □ハ甚乏數有様ナリ、○北部之方ヨリ火船之入港安ニ箱館ニ於テモ彌榎  
 本ヲ初め士卒迄も一致城ヲ枕ニシテ必死之覺悟ヲ為シ断然と防戦精々武

勇ヲ振ハントノ決心ナリト数々報告モ有之候得共、動モスレバ官軍襲フ  
 ガ否ヤ直ニ遁走中ニ暫時之對戦も難出来勢ヒナリ、  
 右千八百六十九年八月朔日之新報略記

Flatbush Acad. L. I.

一〇、英文書簡

[No. 1]

My dear friend. Having just this noon written to you a letter, I  
 had greatest pleasure in receiving your very welcome letter of the  
 10th inst which reached me just this evening. You cannot imagine  
 how much I enjoyed in reading your such kind note, wh made me  
 to feel as though I have seen you, I am exceedingly glad to hear  
 that you are quite well. I was sorry & got headache instantly to  
 learn that you have looked for a letter from me every day since you  
 arrived there but as yet have been disappointed. As I wrought to  
 you this noon, surely there was no even an hour since you left us  
 at Flatbush that I did not think of you & your polite manners  
 which I miss very deeply now. And when I returned here on  
 Saturday evening, there I found eight letters for me which requi-

red to answer as soon as I could. And on Monday morning a friend came from New York, who spent two days here with me. And on Wednesday Rev. J. H. Bollagh has come to see & to take me to his father's house at Tenafly New Jersey, but I could not go as I received an invitation from Raritan before he came. Now dear friend I have a great desire to coming over to see you there but unfortunately I left the rest vacation so short time & besides a new friend of my native country, is coming here on Monday the 13th, so I have to procure for him teacher & boarding house, & c. Would you be so kind enough to let me know that how long you going to stay there? Do you remember that when you spoke me to go to Block Island at first I told you that perhaps I might (should) be on Block Id in next Sunday? Do you think I told you that for joke or really? I may say, that doubtless. To be sure, I meant to go there from my true heart.

[No. 2 ]

I hope both of you are quite well since I left. You see fortunately I could catch the train 3.30 when I went to inquire the cars for N. Y. at the depot. I arrived here at 5 o'clock. This morning I saw Rev. Dr. F. at his office, then he said very kindly as ever

that I am very glad to see you now, just I told Ku that to write to you to come to F. B. to spend my rest vacation on last Friday. (日下部) Did you not receive a note from him yes. So, I think I shall go to stay there for two weeks, then I shall be very happy to go back home in N. B. at the end of this month. Now please excuse to say good bye as I proceed to L. I. just now & when you write to me please address at % Rev. Mack Acad Flatbush Long Island.

Yours truly Kozo. Soogi.

[No. 3 ]

11th Augt 1869

My dear friend,

Having just this afternoon returned from Millstone where I had been making a visit Rev. Corwin ever since the day before yesterday afternoon I hastened to answer your welcome letter of the 9th inst. as soon as I could. Dear friend I feel very thankful to your most kind & earnest desire to impart a portion of your money if you could obtain \$50 from Charly. But you see, as I mentioned (told) you in answering to you, you might obtain 50 or 100 dollars without any difficulty in favour or generosity of West. College & the acquaint-

tances of Dear Charly, yet I did expect to be impart any portion of that money whatever a large sum you might have obtained. So that the proposal was occurred in my mind until I saw your note. Now I do hope dear. Do not trouble any more again for my sake, because I am entirely trusting upon the providence of God for I am not anxious at all even for tomorrow & do believe that unquestionably. He would make us quite comfortable & get alone nicely in all respects, if we were faithful enough to serve Him whatever we may by called upon & pray earnestly for Him, having embraced His true commandments & doctrines. I am sorry to hear that you left so little sum of money now, it would be very convenient if you could wait until the first part of next month but if you cannot I think you have to accept Dear Thoma's intention. I trust your two boxes would have reached you already. I was much obliged for your asking to come Willbrahm. I would like to make a visit you very much indeed, if I were not so poor as now, but unfortunately I cannot help if you know I am too poor to come over to see you off so far at present. I, day before yesterday, called upon Rev. Corwin, one of the bretheren in Jesus, at Millstone, having the intention to stay only for a few hours. But he most kindly & sincerely persuaded me to stay there over the night &

to go to Annual Bible Society meeting in Rev. Dr. Mesick's Church of Somerville where distant 6 miles from Millstone. So, next day I drove together with him & his family to Somerville. Where commenced Rev. Dr. Roggers the paster in Presbyterian Church of Baund Brock to preach the sermon at 10.30 & the usual service was ever after 1 o'clock. There a very grant Dinner supplied on the open air for the congregation but we were invited by Mrs. Bascals for Dinner. And in the after from 2.0 there commenced a short speeches by several persons viz. Rev. Van Nest DD, who has been in Italy for sometime, gave quite interesting account of Italian affairs wh improved greatly since the last revolution & about Garibaldi & now the gate of Roman Catholic superstition is going to open for the Protestantism & c. And Van Cleef & also some Presbyterian & Methodist bretheren made a good speeches until after 4 o'clock. It was an interesting & grant meeting so that I was truly pleased to have attended it. I enjoyed exceedingly in visitation of Rev. C. at Millstone where I spend two nights. I received a kind note from 伊勢氏 I am glad to hear that he is quite well. 富田 has left here for Lage George the day before yesterday in order to attend 勝君 because 日下部 has obliged to leave him there on account of unhealth & he is in

Flatbush Acad. Long Island.

(No. 4 )

% Rev. E. T. Mack Flatbush Acad. L. I. Augt 17th 69,

My dear friend,

Please excuse me for allowing several days to elapse without writing you since I had a most pleasant time in visiting you. I enjoyed myself and was interested very much indeed in all of your conversation so that I have to thank you deeply for your kind treatment. How can I repay you for such politeness. I was very much interested in attending that Annual Bible society meeting at Somerville. Since I left your home on last Wednesday the 11th I went to Perth Amboy on Hudson river & on that evening to Professor Marshals house at Bound Brook, at his invitation, where I spent two days having a nice time & on Sunday I was in New York on last Saturday the 14th & I attended Rev. H. W. Beecher's Church in Brooklyn. I came here on last Monday evening. I like this place very much for there are so many trees around & so much woods in the neighborhood comparatively to N. B. & there is a grant & a beautiful Park which they are improving rapidly and intend to make superior to the central park

one of these days. I find very nice walks here now, and I like

Rev. Mr. & Mrs. Mack & all the rest of the family very much indeed so that I hope to stay here until the end of this month,

if I may. Please accept these two enclosed Cartes-de-visite of mine which I promised to send you I shall be indeed glad to see you in N. B. when you come again on the first of next month as I wish to talk with you soon.

Will you please give my kindest regards to your father & mother.

(No. 5 )

My dear friend,

Having just returned from Flatbush Long Island where I had been making a visit Rev. E. T. Mack ever since three weeks, I hastened to answer your welcome letter of the 1st inst which I received this morning with a great pleasure. I suppose, you might have begin to think that I have forgotten to write to you. Be assured I have not forgotten it, but have often thought of you, & the same time I was anxiously awaiting to hear from you. Although I expected very much to see you when you were in N. Brunswick, yet I was sorry that I could not come to see you just before the commencement as I had to attend the College in the

morning. So I called on you immediately after the commencement was over, as I thought you would not leave there until next day, but it was after you have gone out(already). I was so much disappointed. On monday the 9th of Ultimo, I made a visit. Rev. E. T. Corwin at Millstone, then he kept me for a few days, and next day Tuesday 10th by Mr. & Mrs. Corwin I was accompanied for Somerville where, you know, the Bible Society Anniversary took place. In this meeting I would have had more pleasure (could find great joy). (I could find it)(I found you were) I looked round for you in vain though at first I thought you might have been there.

Then I wished I had a time to come to see you all of course, however, unfortunately we drove back to Millstone again after soon that meeting was over. I am very glad to hear that you receive long letters from Mr. & Mrs. Stout every month, telling how busy they are and how happy. I was very glad to receive a nice letter two month ago, from Mr. Stout telling that the both of them are quite well & enjoying very much themselves in living Dai-Toku-Zi where Mr. Ver. used live & a very delightful & healthy situation &(one of the finest views in Nagasaki) & that the Government asked him to take Mr. Verback's place in the School after he has gone to Yedo & so Mr. S teaches English

there everyday &c. We heard from Noon, that he arrived in Yokohama quite safely on the 27th July & is getting much better & has good appetite now. I hope I could go with all of you to Festival in the woods on Wednesday, but I think you might go there early in the morning so I could not find any plan to meet you before your starting. I wish, however, to come to see you at Raritan either on Thursday or Friday of this week. I shall be very happy if you could find a time, to let me know when you should be at home. Hoping all of you are quite well.

Yours truly

[No 6 ]

Dear friend,

Received your yesterday's letter note just now, I thank you very much for your immediate information that you would not go to the Festival until one o'clock to day, Surely I would like very much to get Raritan before one o'clock, but it is already after 2 o'clock. Rev. J. H. Ballagh has come here from this morning to take me to see his father at his home & to stay for a few days but I answered him with much thanks that I will come another

time, because I promised to visit Mrs. Stout's home at Raritan either tomorrow or the day after tomorrow. Dear friend as I got just now to do some work for tomorrow quite unexpectedly, I shall be truly glad to see you, at your home on the day after tomorrow Friday the 10th. In the hope all of you would have enjoy very much & having a nice time in the Festival.

Yours truly

[No. 7 ]

My dear friend,

Since you left us at Flatbush for Fire Island, we were very lonely & I missed you very much. I enjoyed, however, in attending.

Please pardon me for allowing so long a time to elapse without writing you since have gone to Fire Island. After you left us at Fire Island we felt lonely & I missed you very much. However,

I enjoyed & was interested in larning the most pleasant & instructive conversations of Dears Mamma, Aunt Martin & my instructress in English Miss Helem & Abby. And then we continued to play Crooque with perseverance as much as we could, nearly every day but I neglected some times, I was too lazy to play(as you know).

How do you like Fire Island, I hope you would like there very

much and that your eyes getting quite well by this time. When your father returned to Flatbush, told us that since you arrived there, you did not sneeze, I was very glad of it. It is indeed, a good sign. I saw the sands which your father brought home by which I can imagin the view of the Island coast. We have several such places where no trees nor grass, but white & very beautiful sands & some times there are only a very few of pine trees. We all expect Ku he came back here on last Saturday evening & I felt some how lonely, but in the night I got a great many viseters of mosquitos who entered into my room with a very fine singing I was, then, not ready for such uninvited guests, so I did not treat them with (the nets)(properly), then they commenced to bite me without much regards but since my folk established the nets built for me I could sleep comfortably. Miss Helem

一一、書簡断片

[ 1 ]

爾来、不得寸暇、乍思御疎遠、龍過追々、國乱も相静り於京師此節、公平之新



大政官創業ニ相成候新報共めつたに相先ツ静謐之模様懸而奉遙賀次第御坐候、然處貴公様ニハ精々邦家之御為メ御尽力之□存居候折柄、我去ル十月廿三日之御懇書昨日○上封者ニストルウイイルベキノ字ニテ島山ト有之西千八百六十九年四月八日、我明治二年二月廿八日歟爰許え相達シ大悦不斜早速謹而

拝誦仕候処、戦争之時分ニ者兵庫之御出張随分面白事共被為在、夫々二月下旬御帰国後不相替尚御奉職之處、何歟無御扱義ニ而御退役之由被伝聞、併シ當分ハ彌御壯健之段先以大慶目出度厚御祝義申上候、通例之俗情ニテ考候ヘハ如何様ト□不存候ヘ共愚存ニ者決而今日志有ル者之其位ニ在ル時而已萬民ノ為メ何ソ上ハ天道ニ遵奉シ朝廷ノ御為メ井「プリンス公之御為充分之忠義ヲ尽シ、下ハ萬民之為メ彌抛身彌尽力竭心成功スルトハ不存候、如何トナレハ此レニ不肖之説話ヲ述誠實丹心ヲ以テ邦家ノ御為メ精々己レノ職掌ヲ尽サント渴志スル者之、假令ヒ少々之暴論過失偶生シ□其職ヲ去ルトモ此地球上ニ現生スル限り、天理自然之大道ニ基キ候得ハ尽忠報國之成功格別其職ニ在テモ無テモ區別者有之間敷歟と存申候、勿論其邊之義最初ヨリ御覚悟ニテ御断之筈ナレハ実ニ愚拙之多弁ヲ述候而者却而踰矩ノ罪も可恐候得者、余ハ不申上候、洋羅巴井米国之政府等ニ於テモ「ミニストル其余萬職始終進退有之實ニ世ノ習者天道ノ若ラシムル處ニ而決而怪ムニ不足事ナリ、小子ニハ御断之模様ハ全ク不存候得共、唯一句御願申度者決而不抱俗事不柄無職御尽力之一条而已ニ御坐候、陳(松村)ニ小夫ニ者先比モ申上通實ニ無餘義訳合ニテ爰許え轉郷致シ候以来、松、(吉田)永、ニも来リ滞学罷在候、當邑ニ者勝安州之一子小鹿生井先生之門弟高(高木)木、(三郎)富田井越前生一人日下部(日下部太郎)八木(八木)何も元氣ニ而勉学ナリ、

told me that perhaps she might be there with you on Friday or (英文書籍 (No. 7.) Miss Helen ニツヅクカ) Saturday of this week, if so please give my most kind regards to her. I will write to her at Flatbush because I am not sure that she might be there with you today. I have just returned from Raritan where I had been making a visit family of Mr. Stout missionary to Japan, ever since day before yesterday. How long do you expect to stay there? Hoping you are quite well in health & that you would enjoy very much there. Having a nice time with your friends in the Hotel.

〔三〕

此以前トハ替り當時者是程外国江御交信之道モ相開ケ候得者、Counsel 役者當分最モ肝要之一役ナリト奉存申候、諸生之身ニ於テハ日本之御為メ全ク商賈者等ノ事ニ關係取計ラフト云訳ニ至ラス且何角取切テ出朝之事も□と取切テ世話致ス一役無之テハ甚不自由ノ義も不少、何れ往々之處ハCounsel 役モ土地之人ヲ御備ヒ被仰付度希望罷在事ニ御坐候、然處先日 French 江金件相談致両三日中以前ニ當分 Boston 滞学致候筑前生平賀氏之方々小子共江壺封ヲ送り候まま形行申上シガ為メ右昏面ハ差上申上候間、何分之御所置奉願候、右之Counsel 役者誰レケ様々名差ヲ以テ申上事ハ難有事、何れ於大政官廣御吟味之上公平之御人撰有之度希願罷在候、French 義者商人仲ケ間ニテハ何モ避セナク程善キ人物ナリト之説承リ、

# 杉浦弘蔵ノ一ト 第二

K. Soogiwoora

Commenced in March 18th 1872. Washington V. S.

千八百七十二年三月八日

## 會議之ケ条

杉浦弘蔵

一、官費留學生ハ各専門之學科ヲ定メシムル事

一、方今在留之生徒ニシテ不行状或ハ薄才或ハ病身等ニシテ帰国スベキモノノ有否ヲ取調ル事

一、當時在留縣費或私費生徒新ニ官費留學願出之分人撰之事

一、學資金取扱之事

一、學費之數ヲ學業ノ進ミニ從ヒ區定スル事

一、學生進學之次第身體之健康行状等ヲ無滯辦務館江届出之手段ヲ取調ル事

一、死去之節其始末ヲ調ル事

一、學科ヲ定ムル事

一、留學生進學之次第云々

大原令之介 席頭外山捨八

書記服部一三 新島七五三太

松村淳蔵

一、方今在留生徒行跡病身又ハ修業ニ堪ヘ難キ者等取調之事

席頭杉浦弘蔵 書記名和 緩

白峰駿馬 山本十介

高木三郎

一、新官費 席頭右同名

一、學費取扱向取調

一、死去之節始末

一、學費ノ數ヲ進業ノ体ニ從ヒ區別スル事

席頭高木三郎 平賀義質

書記富田鉄之助 杉浦弘蔵

平賀 義質 杉浦 弘蔵 大原令之助

外山 捨八 富田鉄之助 山本 重助

服部 一三 高木 三郎 新島七五三太

松村 淳蔵 名和 緩 白峰 駿馬

右官費留學規則取調可申者、森少辨務使田中文部大丞會議主宰被致候條  
可得其意候也

壬申二月

特命全權使節

留學生規則取調規律

一、決議之上全權使節之審断ヲ乞ヒ候書面江ハ必使節ノ可否ヲ記シ返却  
アルベキ事、尤否之分ハ其道理ヲ揭示アルベキ事

一、其分課々々之席頭ヲ其分課々々之入札ヲ以テ取究候事

一、主宰兩人ノ内壹人ハ必ス會議之日出席之事

一、議論之節者必ス主宰ノ諾ヲ終テ人々發言可致事

一、其分課々々ヨリ書記官壹人宛可差出事

但書記發言之節者書記席ヲ退キ發言可致事

一、會議ニテ他言ヲ免サザルケ條ハ決シテ口外致ス間敷事

但右會議ニテ免サレザルケ條ヲ他人ニ洩シ候ニ付而ハ此議員三

分ノ二會議上ハ散會之後タリトモ其罪ニ應シ相當之罰可申付事

一、會議者弁務使館ニテ朝十一字ヨリ開議之事

一、チユースデイニハ初度會議之事時刻十一時ヨリ始ム

一、前以断リナクシテ欠席又ハ時刻ニヲ過ク候モノハ相當之罰金可申付

一、各其分課々々ヨリ假令ヘハ其議論事數種ニ分レ候トモ其假其主意ヲ  
書記シ尚姓名ヲ加ヘ見込可申出事

一、總會議之節ハ其議論入札多數ヲ以テ決定之事

一、總會議之日ハ議員三分ノ二會合之ハ其余人ニ拘ハラス開議之事

但三分ノ二決議之上ハ其余人ハ其席ニ加ラストモ同議江相認ム

ベキ事

森 有禮 田中不二磨 杉浦 弘藏

富田鉄之助 名和 緩 外山 捨八

大原令之助 服部 一三 松村 淳藏

山本 重介 高木 三郎

少弁務使

森 有禮 文部大丞 田中不二磨

別紙十二人之者官費留學規則取調申付候ニ付右取調中相當之入費ハ下賜

候事

壬申二月

特命全權使節

官費留學生規則取調ノ為會議セシメタル議員ヨリ指出シタル書面ニハ  
每款採用ノ可否ヲ記シ之ヲ主宰ニ告知スベシ

但採用シ難キ個條ハ其所以ヲ略記スベシ

二月朔

特命全權使節